

一般国道9号（名和淀江道路）の改築に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書）

鳥取県西伯郡名和町

名和飛田遺跡

2005

財団法人 鳥取県教育文化財団
国土交通省 倉吉河川国道事務所

一般国道9号（名和淀江道路）の改築に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書）

鳥取県西伯郡名和町

名和飛田遺跡

2005

財団法人 鳥取県教育文化財団
国土交通省 倉吉河川国道事務所



1 竪穴住居 2・3 完掘状況（北から）



2 掘立柱建物 1 完掘状況（南東から）



1 第3調査地第1遺構面出土土器



2 竪穴住居2・3出土彩色記号須恵器



3 竪穴2出土移動式竈・甕・甌



1 第3調査地E区完掘状況(北東から)



2 竪穴住居6完掘状況(北東から)

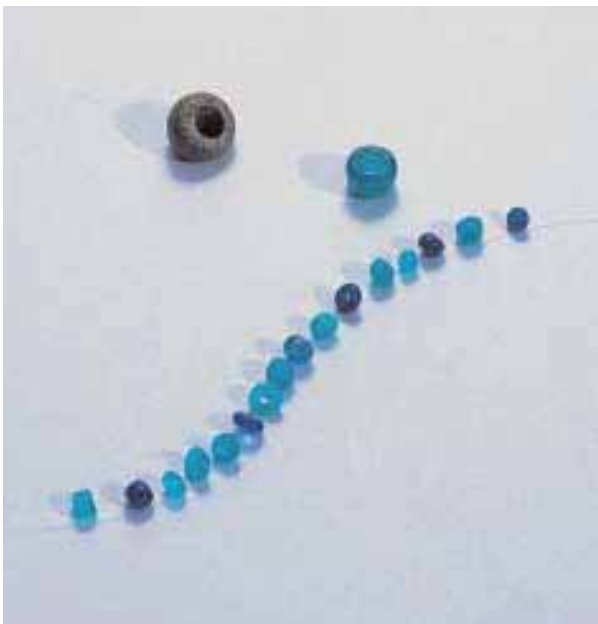


3 竪穴住居5遺物出土状況(北から)

カラー図版 4



1 第3調査地第2遺構面出土土器



2 竪穴住居6出土玉類



3 竪穴5出土絵画土器

序

近年、鳥取県では妻木晩田遺跡、青谷上寺地遺跡をはじめとする古代の重要な遺跡の発見が相次いでおり、当時の集落の姿や暮らしの様子が具体的に語られるようになりつつあります。

先人が残した素晴らしい遺産を後世に伝承することは、現在に生きる私たちの重要な責務です。

ところで、県内においては、現在、山陰自動車道の整備が着々と進められているところでありますが、当財団は、国土交通省からの委託を受け、この事業に係わる一般国道9号（東伯中山道路・名和淀江道路）の改築に先立つ埋蔵文化財の発掘調査を実施してきました。

そのうち、名和町にある名和飛田遺跡では、弥生時代の絵画土器や古墳時代の大型掘立柱建物跡など、この地域の歴史を解明するための重要な資料を確認することができました。発掘調査終了直前には、現地説明会を開催し多くの方々の御来場をいただいたところですが、このたび、調査結果を報告書としてまとめることができました。

この報告書が、今後、郷土の歴史を解き明かしていく一助となり、埋蔵文化財に対する理解がより深まることを期待しております。

本書をまとめるにあたり、国土交通省倉吉河川国道事務所、地元関係者の方々には、一方ならぬ御指導、御協力を頂きました。心から感謝し、厚く御礼申し上げます。

平成17年3月

財団法人 鳥取県教育文化財団
理事長 有田博充

序 文

一般国道9号は、起点の京都府京都市から山口県下関市にいたる、総延長約691kmの幹線道路であり、西日本日本海沿岸地域の産業・経済活動の大動脈として、地域住民の生活と密着し大きな役割を果たしています。

このうち、国土交通省倉吉河川国道事務所は、東伯郡湯梨浜町から米子市（鳥取 島根県境）までの76.6kmを管轄しており、時代の要請に沿った各種の道路整備事業を実施しているところです。

名和淀江道路は、西伯郡名和町から西伯郡大山町にかけての、国道9号の渋滞緩和、荒天時の交通障害の解消、また、災害時の緊急輸送の代替道路確保、などを目的として計画された高規格幹線道路（自動車専用道路）であり、鋭意事業に着手しているところです。

このルートには、多数の埋蔵文化財包蔵地がありますが、鳥取県教育委員会と協議を行い、文化財保護法第57条の3の規定に基づき、鳥取県教育委員会教育長に通知した結果、事前に発掘調査を実施し、記録保存を行うこととなりました。

平成16年度は、「名和中畝遺跡」、「名和飛田遺跡」、「門前上屋敷遺跡」、「門前第2遺跡」の4遺跡について財団法人鳥取県教育文化財団と発掘調査の委託契約を締結し、同埋蔵文化財センターによって発掘調査が行われました。

本書は、上記の「名和飛田遺跡」の調査成果をまとめたものです。この貴重な記録が、文化財に対する認識と理解を深めるため、ならびに、教育及び学術研究のために広く活用されることを願うと同時に、国土交通省の道路事業が、文化財保護に深い関心を持ち、記録保存に努力していることをご理解いただければ幸いです。

事前の協議をはじめ、現地での調査から報告書の編集にいたるまで御尽力いただいた財団法人鳥取県文化財団の関係者に対して、心から感謝申し上げます。

平成17年3月

国土交通省 倉吉河川国道事務所
所 長 嘉本 昭夫

例 言

1. 本報告書は、国土交通省中国地方整備局倉吉河川国道事務所の委託により、財団法人鳥取県教育文化財団埋蔵文化財センターが「一般国道9号（名和淀江道路）の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査」として平成15・16年度に実施した名和飛田遺跡の調査報告である。
2. 本報告書に収載した遺跡は、西伯郡名和町大字名和字飛田2043番地ほかに所在する。
3. 本発掘調査では、16,631m²を調査した。
4. 本報告書における方位は公共座標北を示し、座標値は世界測地系に準拠した公共座標第 系 の値である。また、レベルは海拔標高を表す。
5. 本報告書に掲載した地図は、名和町発行の1 / 2,500地形図、および国土地理院発行の1 / 25,000地形図を縮小して使用した。
6. 本発掘調査にあたり、出土した鉄関連遺物の分類をたたら研究会委員穴澤義功氏に、石材鑑定を遠藤勝壽氏に、出土土器の胎土分析を岡山理科大学白石純氏にそれぞれお願いした。また、白石氏には玉稿を賜った。記して深謝いたします。
7. 本発掘調査にあたり、遺跡の航空写真、基準点および地形測量、遺物実測の一部、炭化物の樹種同定、放射性炭素年代測定、赤色顔料の成分分析、ガラス玉の蛍光X線分析、石器石材の蛍光X線分析をそれぞれ専門業者に委託した。
8. 掲載した遺構図は文化財主事、調査員および調査補助員が作成したものを整理作業員が浄書した。
9. 遺物実測図の作成は文化財主事、調査員および整理作業員が行なった。なお石器の実測・浄書は一部を除き専門業者に委託した。
10. 遺構および遺物の写真撮影は文化財主事および調査員が行った。
11. 発掘調査時に作成した図面、写真などの記録類、および出土遺物などは鳥取県埋蔵文化財センターに保管されている。
12. 本報告書の作成は文化財主事および調査員が協議して行い、北、三木が編集した。文責は目次および文末に記した。
13. 現地調査および報告書の作成にあたっては上記の方々のほかに、多くの方々からご指導、ご助言およびご支援いただいた。明記して深謝いたします。（敬称略、順不同）

辻 信広（名和町教育委員会） 下高瑞哉（米子市教育委員会） 佐伯純也（米子市文化事業団） 山田康弘（島根大学） 角田徳幸 柳浦俊一 稲田陽介（島根県埋蔵文化財調査センター） 中川 渉 柏原正民（兵庫県教育委員会） 谷本 進（養父市教育委員会） 山崎真治（東京大学大学院） 和田大作（岡山大学大学院） 池田 毅（神戸市立博物館） 米田克彦 石田為成（岡山県古代吉備文化財センター）

凡 例

1. 遺跡の略称はN T Tとした。
2. 現場で採取した図面、写真などの記録類、遺物の注記にはすべて調査時点の地区名称および遺構番号を記載している。本書での名称と調査時名称との対応は本文に記載した新旧地区名称対照表、新旧遺構対照表に示した。
3. 遺構図・遺物実測図の縮尺は図中に表示した。
4. 遺物番号には次の略号を付し、遺物の種別ごとに番号を通した。
番号のみ：土器、土製品 S：石器 F：鉄製品 B：玉類
5. 本文、挿図および写真図版の遺物番号は一致する。
6. 遺物実測図のうち須恵器は断面を黒塗り、それ以外は白抜きで表した。その他の表現は図中に凡例を示している。
7. ピット計測表、遺物観察表は本文末に一括して記載した。
8. 土器の分類と編年上の位置づけ、遺構の時期決定にはおもに下記の文献を参照した。

< 弥生時代 >

清水真一1992「因幡・伯耆地域」『弥生土器の様式と編年（山陽・山陰編）』木耳社

濱田竜彦2003「大山北麓地域における弥生時代後期土器の編年」『史跡妻木晩田遺跡第4次発掘調査報告書』鳥取県教育委員会

< 古墳時代 >

大谷晃二1994「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』11 島根考古学会

岡野雅則2004「古墳時代中期から後期の土器について」『茶畑遺跡群（第3分冊）』財団法人鳥取県教育文化財団

牧本哲雄1999「古墳時代の土器について」『長瀬高浜 園第6遺跡』財団法人鳥取県教育文化財団

なお、縄文土器の分類・時期決定の参考にした文献は本文中に記載した。

目 次

序

序文

例言・凡例

目次

挿図目次

挿表目次

図版目次

第1章 発掘調査の経緯

- 第1節 調査に至る経緯……………(北)・ 1
- 第2節 調査体制…………… 2

第2章 位置と環境

- 第1節 地理的環境……………(日置)・ 4
- 第2節 歴史的環境……………(日置)・ 4

第3章 調査の概要

- 第1節 遺跡の概要……………(北)・ 7
- 第2節 調査の経過と方法……………(北)・ 8

第4章 第1調査地・第2調査地の調査

- 第1節 第1調査地……………(北)・ 8
- 第2節 第2調査地…………… 9
 - 1. 概要……………(北)・ 9
 - 2. 調査地内の堆積……………(北)・ 9
 - 3. 第1遺構面……………(北・日置)・ 9
 - 4. 第2遺構面……………(北)・ 11
 - 5. 第3遺構面……………(北)・ 13
 - 6. 第4遺構面……………(北)・ 13
 - 7. ⑤・⑥層出土遺物……………(北)・ 15

第5章 第3調査地の調査

- 第1節 調査の概要……………(北)・ 21
- 第2節 調査地内の堆積……………(北)・ 21
- 第3節 第1遺構面の調査…………… 28
 - 1. 概要……………(北)・ 28
 - 2. 中世の調査……………(三木)・ 28
 - 3. 古墳時代の調査……………(北・三木・日置)・ 34

4 . 第 1 遺構面遺構外出土遺物	(北)	79
第 4 節 第 2 遺構面の調査		82
1 . 概要	(北)	82
2 . 弥生時代の調査	(三木)	82
3 . 縄文時代の調査	(北・日置)	101
4 . 時期不明の遺構	(三木・日置)	110
第 5 節 遺物包含層の調査		115
1 . 概要	(北)	115
2 . 弥生土器	(日置)	118
3 . 縄文土器	(北)	126
4 . 石器	(北)	149

第 6 章 特論

第 1 節 竪穴住居 3 出土須恵器杯身赤色部の顔料分析	藤根 久(パレオ・ラボ)	180
第 2 節 名和飛田遺跡から出土した炭化材の樹種	パリノ・サーヴェイ株式会社	182
第 3 節 名和飛田遺跡竪穴 2 出土炭化材の放射性炭素年代測定	株式会社 加速器分析研究所	184
第 4 節 ガラス小玉の分析	藤根 久(パレオ・ラボ)	186
第 5 節 名和飛田遺跡出土土器の胎土分析	白石 純(岡山理科大学自然科学研究所)	189
第 6 節 石器石材原産地推定	藤根 久(パレオ・ラボ)	195
第 7 節 縄文時代早期末・前期初頭の土器と石器について	(北)	202
第 8 節 名和飛田遺跡出土の彩色記号をもつ須恵器について	(三木)	213
第 9 節 大型建物をもつ古墳時代後期の名和飛田遺跡	(日置)	219

第 7 章 まとめ

ピット計測表	230
遺物観察表	236

図版

特論図版

報告書抄録

挿図目次

図 1	名和飛田遺跡位置図……………	1	図 33	土坑 4(2)……………	39
図 2	周辺の遺跡……………	6	図 34	竪穴住居 2(1)……………	40
図 3	名和飛田遺跡地区配置図……………	7	図 35	竪穴住居 2(2)……………	42
図 4	第 1 調査地完掘平面図および 土層断面図……………	9	図 36	竪穴住居 2(3)……………	43
図 5	第 2 調査地内土層断面図……………	10	図 37	竪穴住居 3(1)……………	44
図 6	第 2 調査地 第 1 遺構面……………	10	図 38	竪穴住居 3(2) 上層出土遺物……………	46
図 7	土坑 1 ~ 3……………	11	図 39	竪穴住居 3(3) 中 ~ 下層出土遺物……………	47
図 8	第 2 調査地 第 2 遺構面……………	12	図 40	竪穴住居 3(4)……………	48
図 9	第 2 調査地 第 3 遺構面……………	12	図 41	竪穴住居 3(5) 床面直上出土遺物……………	49
図 10	第 2 調査地 第 4 遺構面……………	13	図 42	竪穴 1(1)……………	50
図 11	第 2 調査地 第 4 遺構面 遺構外出土遺物(④層出土)……………	14	図 43	竪穴 1(2)……………	51
図 12	第 2 調査地 ⑤・⑥層出土縄文土器(1) [早期 ~ 中期]……………	15	図 44	竪穴 2(1)……………	52
図 13	第 2 調査地 ⑤・⑥層出土縄文土器(2) [後期]……………	16	図 45	竪穴 2(2)……………	54
図 14	第 2 調査地 ⑤・⑥層出土縄文土器(3) [粗製土器・底部]……………	17	図 46	竪穴 2(3)……………	55
図 15	第 2 調査地 ⑤・⑥層出土石器(1)……………	19	図 47	竪穴 2(4)……………	56
図 16	第 2 調査地 ⑤・⑥層出土石器(2)……………	20	図 48	掘立柱建物 1(1)……………	58
図 17	第 3 調査地内土層断面模式図……………	21	図 49	掘立柱建物 1(2)……………	59
図 18	第 3 調査地内土層断面図(1)……………	22	図 50	掘立柱建物 2……………	60
図 19	第 3 調査地内土層断面図(2)……………	23	図 51	掘立柱建物 3……………	61
図 20	第 3 調査地内土層断面図(3)……………	24	図 52	掘立柱建物 4……………	63
図 21	第 3 調査地内土層断面図(4)……………	25	図 53	土坑 5……………	64
図 22	第 3 調査地内土層断面図(5)……………	26	図 54	土坑 6……………	65
図 23	第 3 調査地内土層断面図(6)……………	27	図 55	土坑 7……………	66
図 24	第 3 調査地第 1 遺構面 遺構配置図……………	29-30	図 56	土坑 8・9……………	67
図 25	第 3 調査地第 1 遺構面地形測量図……………	31	図 57	土坑 10 ~ 16……………	68
図 26	中世ピット(1) P16……………	32	図 58	土坑 17 ~ 19……………	69
図 27	中世ピット(2) P17 ~ P19……………	33	図 59	溝 1(1)……………	70
図 28	中世ピット(3) P20・P21……………	34	図 60	溝 1(2)……………	71
図 29	竪穴住居 1(1)……………	35	図 61	溝 1(3) 上層出土遺物……………	73
図 30	竪穴住居 1(2)……………	36	図 62	溝 1(4) 下層出土遺物……………	74
図 31	竪穴住居 1(3)……………	37	図 63	溝 1(5) 下層出土遺物……………	75
図 32	土坑 4(1)……………	38	図 64	溝 1(6) 下層出土遺物……………	76
			図 65	溝 1(7) 下層出土遺物……………	76
			図 66	第 1 遺構面ピット P24……………	77
			図 67	第 1 遺構面ピット出土遺物……………	77
			図 68	第 3 調査地遺構外出土遺物……………	78
			図 69-1	第 3 調査地第 1 遺構面 ピット配置図(1)……………	80

図 69-2	第3調査地第1遺構面 ピット配置図(2)・・・	81	図105	縄文土器グリッド別出土量模式図(1) [早期末～前期初頭土器]・・・	128
図 70	第3調査地第2遺構面 遺構配置図・・・	83-84	図106	縄文土器グリッド別出土量模式図(2) [後期有文土器]・・・	128
図 71	第3調査地調査後地形測量図・・・	85	図107	縄文土器グリッド別出土量模式図(3) [粗製土器]・・・	129
図 72	竪穴住居4(1)・・・	86	図108	包含層出土縄文土器(1) [早期～前期初頭]・・・	131
図 73	竪穴住居4(2)・・・	87	図109	包含層出土縄文土器(2) [早期末～前期初頭]・・・	132
図 74	竪穴住居5(1)・・・	90	図110	包含層出土縄文土器(3) [早期末～前期初頭]・・・	134
図 75	竪穴住居5(2)・・・	91	図111	包含層出土縄文土器(4) [早期末～前期初頭]・・・	135
図 76	竪穴住居6(1)・・・	92	図112	包含層出土縄文土器(5) [早期末～前期初頭]・・・	136
図 77	竪穴住居6(2)・・・	93	図113	包含層出土縄文土器(6) [早期末～前期初頭]・・・	138
図 78	竪穴3・・・	96	図114	包含層出土縄文土器(7) [早期末～前期初頭]・・・	139
図 79	竪穴4・・・	97	図115	包含層出土縄文土器(8) [早期末～前期初頭]・・・	140
図 80	竪穴5(1)・・・	98	図116	包含層出土縄文土器(9) [前期・中期]・・・	141
図 81	竪穴5(2)・・・	99	図117	包含層出土縄文土器(10) [後期初頭～前葉]・・・	141
図 82	土抗20・・・	100	図118	包含層出土縄文土器(11) [後期中葉]・・・	142
図 83	土抗21・・・	100	図119	包含層出土縄文土器(12) [後期中葉]・・・	143
図 84	土抗22(1)・・・	102	図120	包含層出土縄文土器(13) [後期後葉ほか]・・・	144
図 85	土抗22(2)・・・	103	図121	包含層出土縄文土器(14) [粗製土器]・・・	145
図 86	土抗23・・・	104	図122	包含層出土縄文土器(15) [粗製土器・底部]・・・	146
図 87	土抗24・・・	106	図123	包含層出土突帯文土器(1)・・・	147
図 88	土抗25・・・	107	図124	包含層出土突帯文土器(2)・・・	148
図 89	土抗26・・・	108	図125	石器グリッド別出土量模式図(1) [出土石器全点]・・・	152
図 90	土抗27～29・・・	109	図126	石器グリッド別出土量模式図(2) [黒曜石製石器]・・・	152
図 91	土抗30～36・・・	110			
図 92	土抗37～41・・・	112			
図 93	土抗42～47・・・	113			
図 94	溝2・・・	114			
図 95	第2遺構面ピット出土遺物・・・	115			
図 96-1	第3調査地第2遺構面 ピット配置図(1)・・・	116			
図 96-2	第3調査地第2遺構面 ピット配置図(2)・・・	117			
図 97	包含層出土弥生土器(1) [前期]・・・	118			
図 98	包含層出土弥生土器(2) [中期]・・・	119			
図 99	包含層出土弥生土器(3) [中期]・・・	121			
図100	包含層出土弥生土器(4) [中期]・・・	122			
図101	包含層出土弥生土器(5) [中期]・・・	123			
図102	包含層出土弥生土器(6) [後期]・・・	124			
図103	包含層出土弥生土器(7) [後期]・・・	125			
図104	包含層出土弥生土器(8) [蓋・底部]・・・	126			

図127	石器グリッド別出土量模式図(3) [安山岩製石器]…153	図150	包含層出土石器(23) 石錘}…177
図128	包含層出土石器(1) 石鏃}…154	図151	包含層出土石器(24) 石錘}…178
図129	包含層出土石器(2) 石鏃}…155	図152	包含層出土石器(25) [敲石・磨石・砥石]…179
図130	包含層出土石器(3) 石鏃}…156	図153	遺跡内での時期別による 胎土比較(K-Ca)…192
図131	包含層出土石器(4) 石鏃}…157	図154	遺跡内での時期別による 胎土比較(Rb-Sr)…192
図132	包含層出土石器(5) 石鏃}…158	図155	弥生中期の各遺跡における 胎土比較(K-Ca)…193
図133	包含層出土石器(6) 石鏃}…159	図156	弥生中期の各遺跡における 胎土比較(Rb-Sr)…193
図134	包含層出土石器(7) 石鏃未製品}…160	図157	古墳後期の器種・焼成別 胎土の比較(K-Ca)…194
図135	包含層出土石器(8) [スクレイパー]…162	図158	古墳後期の器種・焼成別 胎土の比較(Rb-Sr)…194
図136	包含層出土石器(9) [スクレイパー]…163	図159	黒曜石の産地判別図…200
図137	包含層出土石器(10) [スクレイパー]…164	図160	サヌカイト・ガラス質安山岩の 産地判別図…201
図138	包含層出土石器(11) 楔形石器}…165	図161	口縁・隆帯形態の分類…202
図139	包含層出土石器(12) 楔形石器}…166	図162	隆帯文土器の特徴の比較…206
図140	包含層出土石器(13) 楔形石器}…167	図163	石器製作工程模式図…208
図141	包含層出土石器(14) 楔形石器}…168	図164	石器製作の遺跡間格差…209
図142	包含層出土石器(15) [その他の器種]…169	図165	彩色記号土器出土遺跡分布図…214
図143	包含層出土石器(16) 石核}…170	図166	名和飛田遺跡出土彩色記号須恵器…216
図144	包含層出土石器(17) 石核}…171	図167	外周柱穴列を伴う大型建物の諸例…225
図145	包含層出土石器(18) 石核}…172	図168	線刻絵画…227
図146	包含層出土石器(19) プランク}…173	図169	鉄製品・製鉄関連遺物構成図…261
図147	包含層出土石器(20) 打製石斧}…174		
図148	包含層出土石器(21) 磨製石器}…175		
図149	包含層出土石器(22) 石錘}…176		

挿表目次

表1	周辺遺跡一覧表	6	表26	名和飛田遺跡周辺集落消長表	226
表2	新旧地区対照表	7	表27	鳥取県内出土絵画土器一覧	227
表3	第2調査地内新旧遺構対照表	9	表28	第1遺構面ピット計測表(1)	230
表4	土坑1～3計測表	11	表29	第1遺構面ピット計測表(2)	231
表5	第2調査地⑤・⑥層出土石器組成表	20	表30	第1遺構面ピット計測表(3)	232
表6	第3調査地内第1遺構面 新旧遺構対照表	28	表31	第2遺構面ピット計測表(1)	232
表7	土坑5～19計測表	65	表32	第2遺構面ピット計測表(2)	233
表8	第3調査地内第2遺構面 新旧遺構対照表	82	表33	第2遺構面ピット計測表(3)	234
表9	土坑20～47計測表	101	表34	弥生土器・土師器・須恵器観察表(1)	235
表10	縄文土器出土数組成表	127	表35	弥生土器・土師器・須恵器観察表(2)	236
表11	石器石材別組成表	149	表36	弥生土器・土師器・須恵器観察表(3)	237
表12	グリッド別石器組成表(1)	150	表37	弥生土器・土師器・須恵器観察表(4)	238
表13	グリッド別石器組成表(2)	151	表38	弥生土器・土師器・須恵器観察表(5)	239
表14	蛍光X線分析による ポイント分析結果	181	表39	弥生土器・土師器・須恵器観察表(6)	240
表15	成分分析を行ったガラス玉と その詳細	186	表40	弥生土器・土師器・須恵器観察表(7)	241
表16	蛍光X線によるガラス玉の 半定量分析結果	188	表41	弥生土器・土師器・須恵器観察表(8)	242
表17	名和飛田遺跡出土土器 分析値一覧表	191	表42	弥生土器・土師器・須恵器観察表(9)	243
表18	分析した黒曜石製・ ガラス質安山岩製石器	195	表43	弥生土器・土師器・須恵器観察表(10)	244
表19	黒曜石製・ガラス質安山岩製石器の 測定結果と原産地推定	198	表44	弥生土器・土師器・須恵器観察表(11)	245
表20	黒曜石原産地の判別群名称	199	表45	弥生土器・土師器・須恵器観察表(12)	246
表21	名和飛田遺跡出土隆帯文土器の 属性構成	204	表46	弥生土器・土師器・須恵器観察表(13)	247
表22	第3調査地A・B・C区 出土石器組成表	207	表47	縄文土器観察表(1)	248
表23	早期末～前期初頭遺跡の石器数と 製作形態	208	表48	縄文土器観察表(2)	249
表24	彩色記号土器出土遺跡一覧	215	表49	縄文土器観察表(3)	250
表25	大型四面庇付掘立柱建物の諸例	221	表50	縄文土器観察表(4)	251
			表51	縄文土器観察表(5)	252
			表52	縄文土器観察表(6)	253
			表53	縄文土器観察表(7)	254
			表54	縄文土器観察表(8)	255
			表55	縄文土器観察表(9)	256
			表56	縄文土器観察表(10)	257
			表57	縄文土器観察表(11)	258
			表58	玉類観察表	258
			表59	石器観察表(1)	259
			表60	石器観察表(2)	260
			表61	鉄製品・製鉄関連遺物観察表	261

図版目次

カラー図版1	1 竪穴住居 2・3 完掘状況	カラー図版3	1 第3調査地 E 区完掘状況
	2 掘立柱建物 1 完掘状況		2 竪穴住居 6 完掘状況
カラー図版2	1 第3調査地第1遺構面出土土器		3 竪穴住居 5 遺物出土状況
	2 竪穴住居2・3出土彩色記号土器	カラー図版4	1 第3調査地第2遺構面出土土器
	3 竪穴 2 出土移動式竈・甕・甑		2 竪穴住居 6 出土玉類
			3 竪穴 5 出土絵画土器
<hr/>			
図版 1	1 調査地遠景 1 調査前		2 竪穴住居 1 完掘状況
	2 調査地遠景 2 2004年度調査後		3 竪穴住居 1 掘り方完掘状況
図版 2	1 調査地近景 1 調査前	図版13	1 竪穴住居 2 土層断面・遺物出土状況
	2 調査地近景 2 2003年度調査後		2 竪穴住居 2 遺物出土状況 1
図版 3	1 調査地近景 3 2004年度調査後		3 竪穴住居 2 遺物出土状況 2
	2 調査地近景 4 2004年度調査後	図版14	1 竪穴住居 2 完掘状況
図版 4	1 第 1 調査地完掘状況		2 竪穴住居 2・3 完掘状況
	2 第 2 調査地第 1 遺構面完掘状況	図版15	1 竪穴住居 3 土層断面
	3 土坑 1 完掘状況		2 竪穴住居 3 遺物出土状況 1
図版 5	1 土坑 2 土層断面		3 竪穴住居 3 遺物出土状況 2
	2 土坑 3 土層断面	図版16	1 竪穴住居 3 165・159・162出土状況
	3 第 2 調査地第 2 遺構面完掘状況		2 竪穴住居 3 161ほか出土状況
	4 第 2 調査地第 3 遺構面完掘状況		3 竪穴住居 3 158・160出土状況
図版 6	1 第 2 調査地第 4 遺構面完掘状況		4 竪穴住居 3 155出土状況
	2 第 2 調査地完掘状況		5 竪穴住居 3 156・160出土状況
	3 第 2 調査地西壁土層断面		6 竪穴住居 3 P5焼土検出状況
図版 7	1 A 区北壁東半部 A - A'土層断面	図版17	1 竪穴住居 3 完掘状況
	2 A 区北壁西半部 A - A'土層断面		2 掘立柱建物 1 完掘状況 1
	3 B 区南北トレンチ D - D'土層断面	図版18	1 掘立柱建物 1 P1土層断面
図版 8	1 C 区南北トレンチ D - D'土層断面		2 掘立柱建物 1 P2土層断面
	2 E 区北壁 F - F'土層断面		3 掘立柱建物 1 P3土層断面
	3 E 区南北トレンチ G - G'土層断面		4 掘立柱建物 1 P9土層断面
図版 9	1 A 区第 1 遺構面完掘状況		5 掘立柱建物 1 P13土層断面
	2 E 区第 1 遺構面完掘状況		6 掘立柱建物 1 P14土層断面
図版10	1 E 区第 1 遺構面完掘状況		7 掘立柱建物 1 P15土層断面
	2 D 区第 1 遺構面完掘状況		8 掘立柱建物 1 P16土層断面
図版11	1 竪穴住居 1 遺物出土状況 1	図版19	1 掘立柱建物 1 完掘状況 2
	2 竪穴住居 1 遺物出土状況 2		2 掘立柱建物 2 完掘状況
	3 竪穴住居 1 91出土状況	図版20	1 掘立柱建物 4 P3土層断面
	4 竪穴住居 1 P5土層断面		2 掘立柱建物 4 P4土層断面
図版12	1 竪穴住居 1 土層断面		3 掘立柱建物 4 P5土層断面

- 4 掘立柱建物4 P11土層断面
5 掘立柱建物4 完掘状況
- 図版21 1 竪穴1 土層断面
2 竪穴1 遺物出土状況
3 竪穴1 174・176出土状況
4 竪穴1 171出土状況
- 図版22 1 竪穴1 169出土状況
2 竪穴1 170出土状況
3 竪穴2 土層断面1
4 竪穴2 土層断面2
- 図版23 1 竪穴2 遺物出土状況1
2 竪穴2 遺物出土状況2
3 竪穴2 炭化材出土状況1
4 竪穴2 炭化材出土状況2
5 竪穴2 P1遺物出土状況
- 図版24 1 竪穴2 完掘状況
2 土坑4 炭化材出土状況
3 土坑4 遺物出土状況
4 土坑5 土層断面
5 土坑5 遺物出土状況
- 図版25 1 土坑6 遺物出土状況
2 土坑7 遺物出土状況
3 土坑8 土層断面
4 土坑9 土層断面
5 土坑10完掘状況
6 土坑11土層断面
7 土坑12土層断面
8 土坑13土層断面
- 図版26 1 土坑14完掘状況
2 土坑15完掘状況
3 土坑16完掘状況
4 土坑17完掘状況
5 土坑18土層断面
6 土坑18完掘状況
7 土坑19完掘状況
8 P16遺物出土状況
- 図版27 1 P18遺物出土状況
2 P20遺物出土状況
3 P20被熱痕跡がある石出土状況
4 P21遺物出土状況
5 溝1 A - A'土層断面
- 図版28 1 溝1 完掘状況1 [B区]
- 2 溝1 B - B'土層断面
3 溝1 C - C'土層断面
4 溝1 完掘状況2 [E区]
5 D区第2遺構面完掘状況
- 図版29 1 C・D・E区第2遺構面完掘状況
2 E区第2遺構面完掘状況
- 図版30 1 E区第2遺構面全景1
2 E区第2遺構面全景2
- 図版31 1 A区東半第2遺構面完掘状況
2 A区西半第2遺構面完掘状況
- 図版32 1 B区第2遺構面完掘状況1
2 B区第2遺構面完掘状況2
- 図版33 1 C区第2遺構面完掘状況
2 E区第2遺構面完掘状況
- 図版34 1 竪穴住居4・5、竪穴3・4・5
完掘状況1
2 竪穴住居4・5、竪穴3・4・5
完掘状況2
- 図版35 1 竪穴住居4 土層断面
2 竪穴住居4 遺物出土状況
3 竪穴住居4 306・311・309出土状況
4 竪穴住居4 S22出土状況
- 図版36 1 竪穴住居4 完掘状況
2 竪穴住居5 土層断面
3 竪穴住居5 遺物出土状況
- 図版37 1 竪穴住居5 318出土状況
2 竪穴住居5
P2土層断面・遺物出土状況
3 竪穴住居5 完掘状況
4 竪穴住居6 土層断面
- 図版38 1 竪穴住居6 遺物出土状況
2 竪穴住居6 320出土状況
3 竪穴住居6 P5土層断面
4 竪穴住居6 完掘状況
- 図版39 1 竪穴3 土層断面
2 竪穴3 遺物出土状況
3 竪穴3 完掘状況
- 図版40 1 竪穴4 土層断面
2 竪穴4 325出土状況
3 竪穴4 完掘状況
- 図版41 1 竪穴5 土層断面1
2 竪穴5 土層断面2

- 3 竪穴5遺物出土状況
- 図版42 1 竪穴5完掘状況
2 土坑22土層断面
3 土坑22遺物出土状況1
4 土坑22遺物出土状況2
- 図版43 1 土坑21土層断面1
2 土坑21土層断面2
3 土坑21完掘状況
- 図版44 1 土坑23遺物出土状況
2 土坑24土層断面・遺物出土状況
3 土坑24完掘状況
4 土坑25完掘状況
5 土坑26完掘状況
6 土坑27完掘状況
7 土坑28完掘状況
8 土坑29完掘状況
- 図版45 1 土坑30完掘状況
2 土坑31完掘状況
3 土坑32完掘状況
4 土坑33完掘状況
5 土坑34完掘状況
6 土坑35完掘状況
7 土坑36完掘状況
8 土坑37完掘状況
- 図版46 1 土坑38完掘状況
2 土坑39完掘状況
3 土坑40完掘状況
4 土坑43完掘状況
5 土坑44完掘状況
6 土坑45完掘状況
7 土坑46土層断面
8 溝2完掘状況
- 図版47 第2調査地第4遺構面
遺構外出土遺物(1)
- 図版48 第2調査地⑤・⑥層出土縄文土器(1)
- 図版49 第2調査地⑤・⑥層出土縄文土器(2)
- 図版50 1 第2調査地第4遺構面
遺構外出土遺物(2)
2 第3調査地中世ピット出土土師皿
3 竪穴住居1出土土器(1)
- 図版51 1 土坑4出土土器(1)
2 竪穴住居2出土土器(1)
- 図版52 1 土坑4出土土器(2)
2 竪穴住居2出土土器(2)
3 竪穴住居3出土土器
- 図版53 竪穴住居3上層出土土器
- 図版54 竪穴住居3下層・床面出土土器、
竪穴2出土土器
- 図版55 1 竪穴1出土土器
2 竪穴2出土土器
- 図版56 1 竪穴住居3・竪穴1出土
手づくね土器
2 竪穴2出土移動式竈
3 掘立柱建物1・3・4出土土器
- 図版57 土坑5出土土器
- 図版58 1 土坑7・8・9出土土器
2 土坑6出土土器
3 溝1上層出土土器
4 溝1下層出土土器
- 図版59 溝1出土土器(1)
- 図版60 溝1出土土器(2)
- 図版61 1 溝1出土土器(3)
2 第1遺構面ピット出土土器
3 第1遺構面遺構外出土土器(1)
4 第1遺構面遺構外出土土器(2)
- 図版62 竪穴住居4・5出土土器
- 図版63 1 竪穴住居4出土土器
2 竪穴住居5出土土器
3 竪穴3・4・5出土土器
- 図版64 1 竪穴5出土土器
2 竪穴4出土土器
3 土坑20出土土器
4 竪穴住居6・土坑21出土玉類
- 図版65 第3調査地包含層出土弥生土器(1)
- 図版66 第3調査地包含層出土弥生土器(2)
- 図版67 第3調査地包含層出土弥生土器(3)
- 図版68 1 第3調査地包含層出土弥生土器(4)
2 第3調査地包含層出土弥生土器(5)
- 図版69 1 土坑22出土土器(1)
2 土坑22出土土器(2)
3 土坑23出土土器
- 図版70 1 土坑24~28出土土器
2 第3調査地包含層出土縄文土器(1)
- 図版71 第3調査地包含層出土縄文土器(2)

図版72 第3調査地包含層出土縄文土器(3)
図版73 第3調査地包含層出土縄文土器(4)
図版74 第3調査地包含層出土縄文土器(5)
図版75 第3調査地包含層出土縄文土器(6)
図版76 第3調査地包含層出土縄文土器(7)
図版77 第3調査地包含層出土縄文土器(8)
図版78 第3調査地包含層出土縄文土器(9)

図版79 1 第3調査地包含層出土石器器種
2 第3調査地包含層出土石核類
3 第3調査地包含層出土
磨製石器・砥石
図版80 1 第3調査地出土鉄製品・
製鉄関連遺物
2 第3調査地出土鉄製品・
製鉄関連遺物X線写真

特論図版1 赤色顔料付着須恵器杯の
マイクロSCOPE写真
特論図版2 赤色顔料付着須恵器杯の
元素マッピング図
特論図版3 竪穴2出土炭化材顕微鏡写真
特論図版4 ガラス小玉(1~3)の
マイクロSCOPE写真(1)

特論図版5 ガラス小玉(4・5)の
マイクロSCOPE写真(2)
特論図版6 ガラス小玉(1~3)の
蛍光X線スペクトル図(1)
特論図版7 ガラス小玉(4・5)の
蛍光X線スペクトル図(2)

第1章 発掘調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

本発掘調査は、国土交通省が山陰自動車道建設の一環として進める一般国道9号(名和淀江道路)の改築工事を原因とし、西伯郡名和町大字名和字飛田の工事予定地に存在する埋蔵文化財包蔵地の記録保存を目的としたものである。建設予定地内は周知の遺跡として登録されていなかったが、分布調査により遺物の散布が認められたことから、遺跡の存在が予想された。そのため、国土交通省倉吉河川国道事務所長より埋蔵文化財の確認調査についての依頼を受けた名和町教育委員会が平成14年度に試掘調査を実施したところ、縄文時代から中世にかけての遺構・遺物が確認され、遺跡の存在が明らかになった。この結果を受け、関連諸機関と協議した鳥取県教育委員会事務局文化課は遺跡の現状保存は困難と判断し、記録保存のための事前発掘調査を行うことになった。これを受けて国土交通省倉吉河川国道事務所長は文化財保護法第57条の3に基づく発掘通知を鳥取県教育委員会教育長に提出した。その上で、記録保存のための事前発掘調査の指示を受けた国土交通省倉吉河川国道事務所は、発掘調査を財団法人鳥取県教育文化財団に委託した。そこで、財団法人鳥取県教育文化財団理事長から鳥取県教育委員会教育長に文化財保護法57条に基づく発掘届を提出し、埋蔵文化財センター名和調査事務所が調査を実施した。(北)

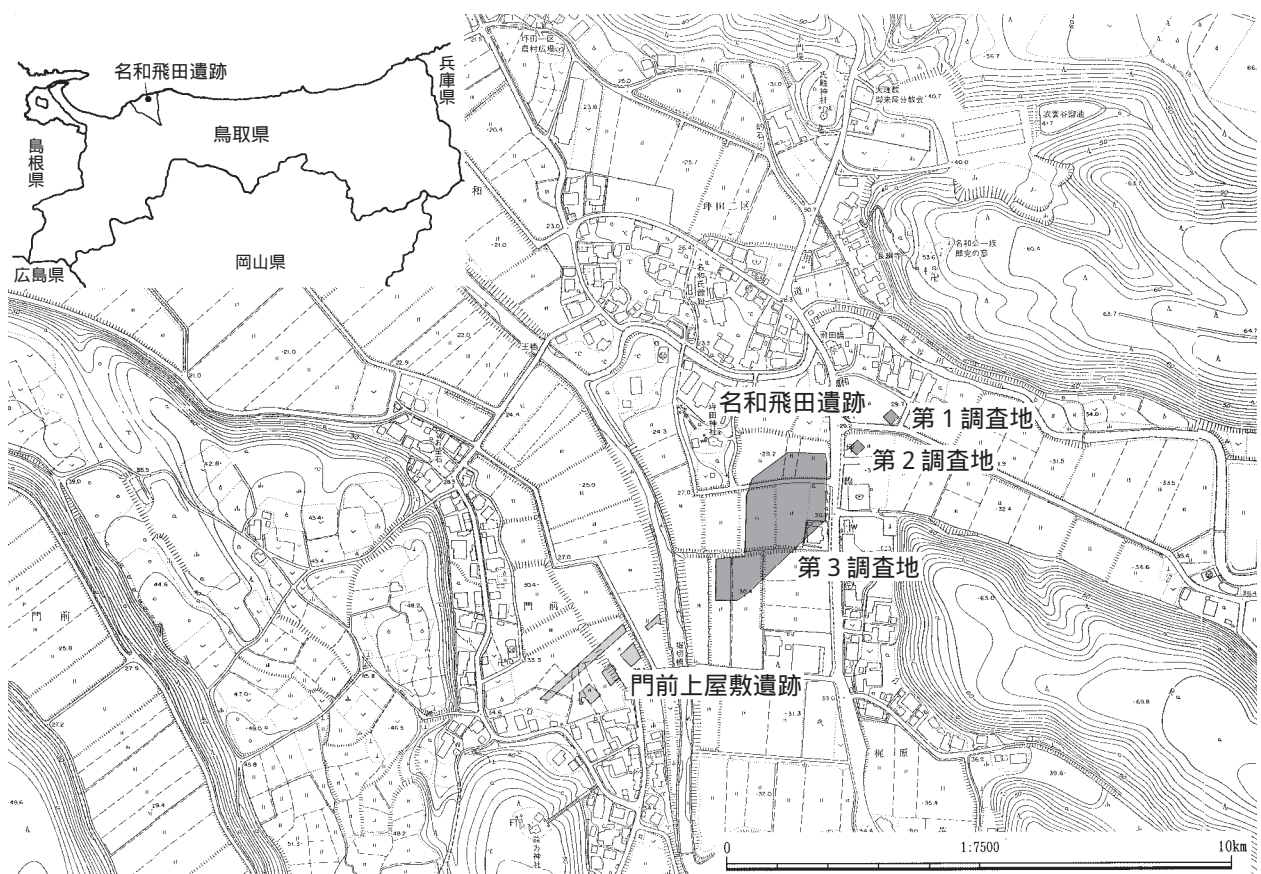


図1 名和飛田遺跡位置図

第2節 調査体制

調査は、以下の体制で実施した。

平成15年度

調査主体	財団法人鳥取県教育文化財団
理事長	有田 博充
常務理事	川口 一彦（兼・鳥取県教育委員会事務局次長）
事務局長	下田 弘人
埋蔵文化財センター	
所長	田中 弘道（兼・鳥取県埋蔵文化財センター所長）
次長	竹内 茂
次長	加藤 隆昭
調査課長（兼）	加藤 隆昭
企画調整班長	山柘 雅美
文化財主事	下江 健太
庶務課長（兼）	竹内 茂
主任事務職員	矢部 美恵
事務職員	田中 陽子 大川 秋子 植田 恵子（9月退職） 谷垣真寿美 小谷 有里
事務補助員	山根 美代（11月採用）
調査担当	名和調査事務所
所長	國田 俊雄
班長	西川 徹（押平尾無遺跡担当）
文化財主事	浜田 真人（押平尾無遺跡担当） 中森 祥、木山 清貴（茶畑六反田遺跡担当） 森本 倫弘（名和小谷遺跡担当） 岡野 雅則（古御堂笹尾山遺跡・古御堂新林遺跡担当） 北 浩明（名和飛田遺跡担当）
調査員	湯川 善一（押平尾無遺跡担当） 三木 雅子（名和小谷遺跡担当） 日置 智、小林 桃子（名和飛田遺跡担当）
調査補助員	遠藤万須美、中橋 智明、秦 美香、山本 宗昭
事務補助員	金田かおる
調査指導	鳥取県教育委員会事務局文化課
調査協力	名和町教育委員会

平成16年度

調査主体	財団法人鳥取県教育文化財団			
	理事長	有田	博充	
	事務局長	中村	登	
	埋蔵文化財センター			
	所長	田中	弘道（兼・県埋蔵文化財センター所長）	
	次長（事務）	竹内	茂	
	次長（専門）	加藤	隆昭	
	調査課			
	課長（兼次長）	加藤	隆昭	
	企画調整班長	山根	雅美	
	文化財主事	大野	哲二	下江 健太
	庶務課			
	課長（兼次長）	竹内	茂	
	主幹	福田	高之	
	事務職員	大川	秋子	谷垣真寿美 山根 美代 小谷 有里

調査担当	名和調査事務所			
	所長	國田	俊雄	
	班長	西川	徹	
	文化財主事	中森	祥、浜田 真人（門前第2遺跡担当）	
		森本	倫弘（門前上屋敷遺跡担当）	
		加藤	祐一、木山清貴（名和中畝遺跡担当）	
		北	浩明（名和飛田遺跡担当）	
	調査員	湯川	善一（門前第2遺跡担当）	
		日置	智（名和中畝遺跡担当）	
		三木	雅子（名和飛田遺跡担当）	
	調査補助員	遠藤	万須美、中橋 智明、秦 美香、山本 宗昭	
	事務補助員	金田	かおる	

調査指導 鳥取県教育委員会事務局文化課

調査協力 名和町教育委員会

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

名和町は鳥取県の西部に位置し、東は中山町、南西は大山町と接する。北は日本海に面し、北北西約70kmに隠岐島を望む大山の裾野地帯にある。名和町域の地形は弥山などから噴出した名和火砕流、弥山火砕流などを基盤とする。西部は阿弥陀川によって形成された阿弥陀川扇状地が広がる。東部は火山台地が発達し、真子川や名和川などの河川と無数に派生する谷によって台地・丘陵・段丘が開削されている。飛田周辺は、このような谷間を南西から流下してくる名和川に、東から流下してくる東谷川が合流する場所にあたる。2つの川に形成された低位段丘上に名和飛田遺跡は立地する。調査地では、これまで度々、土石流や洪水があった氾濫原であったことが確認された。なお現況では調査地西側の名和川側は顕著な段丘崖となっている。(日置)

第2節 歴史的環境

1 旧石器時代～縄文時代

<旧石器時代> 門前第2遺跡西畝地区では始良丹沢火山灰層下のローム層から、黒曜石製のナイフ形石器を主体とする石器群が良好な状態で出土している。ほかに名和小谷遺跡で黒曜石製国府型ナイフ形石器、押平尾無遺跡^{おしならおなし}で黒曜石製角錐状石器が出土している。

<縄文時代> 草創期は有茎尖頭器が下大山第6遺跡・陣構第3遺跡で単独出土している。名和川西側の丘陵上に所在する門前第2遺跡菖蒲田地区では早期の集石群と押型文土器が確認されている。早期の遺物はほかに古御堂金蔵ヶ平遺跡^{こみどうかなくらがなる}、上大山第1遺跡、角塚遺跡^{すみづか}、高田第4遺跡、茶畑山道遺跡などでみつまっている。前期には目立った遺跡は少ないが、名和乙ヶ谷遺跡^{おとがたに}で玦状耳飾^{けつじょう}などが出土している。名和衣装谷遺跡、名和中畝遺跡などでは中期の遺構と遺物が確認されている。後期のものには古御堂遺跡、南川遺跡があり、後者では石組炉を備えた後期初頭の住居跡がみつまっている。晩期には、大塚第3遺跡で住居跡が検出されているほか、高田第10遺跡^{もずらやしき}、文殊領屋敷遺跡などで遺物が出土している。

2 弥生時代

<前期> 目立った前期の遺跡は少ないが、大塚岩田遺跡で環濠の可能性のある溝が検出されている。

<中期> 当期の集落は茶畑地域を中心とする丘陵側に多い。茶畑山道遺跡・茶畑六反田遺跡や茶畑第1遺跡で、独立棟持ち柱を備える大型掘立柱建物を含む集落跡が確認され、当地の拠点であったと共に居住域の変遷を辿れる。また、押平弘法堂遺跡では土墳墓群が確認されている。名和川流域では、本遺跡の対岸の段丘上に所在する門前上屋敷遺跡で竪穴住居などが検出されている。

<後期> 名和町内には大塚塚根遺跡、押平尾無遺跡、茶畑第2遺跡、茶畑六反田遺跡、茶畑山道遺跡、東高田遺跡などがある。大山町から淀江町にまたがる妻木晩田遺跡では、多数の竪穴住居と掘立柱建物、四隅突出型墳丘墓を含む環濠集落跡が良好に遺存していた。茶畑山道遺跡、茶畑第1遺跡では、大型の竪穴住居や掘立柱建物が終末期から古墳時代前期にかけて営まれた。

3 古墳時代

前期には茶畑第1遺跡で小規模な古墳が検出されているのみで目立たない。中期古墳には、すで

に消滅したハンボ塚古墳がある。径33mの円墳で円筒埴輪や形象埴輪が出土している。中山町高塚古墳と同時期で類似する。後期には横穴を含むいわゆる群集墳が造営される。茶畑古墳群、高田古墳群、門前古墳群、富長山村古墳群、坪田古墳群、豊成古墳群^{とよしげ}などがある。集落は弥生時代終末から前期まで継続する茶畑第1遺跡、中期～後期の押平尾無遺跡、古御堂笹尾山遺跡、大塚塚根遺跡などがある。いずれも多数の竪穴住居で構成される集落跡である。

4 奈良～平安時代

<奈良時代> 律令制の施行に伴って西伯耆でも古代寺院や官衙、山陰道、条里制の施行等が各地で整備されていく。高田原廃寺では、乱石積基壇や溝状遺構が検出され、淀江町上淀廃寺跡と同型式の単弁十二葉蓮華文軒丸瓦が出土している。平安時代に編纂された『延喜式』には、名和町域が含まれる旧汗入郡には和奈駅（奈和の誤記か）が置かれていたとある。しかし、その駅の位置や山陰道のルートなど詳細は不明である。阿弥陀川の河口近くの大塚屋敷遺跡では倉庫群と推測される掘立柱建物群がみついている。柝原窯跡は炭窯と考えられ、上寺谷遺跡の製鉄炉やその周辺での鉄滓表採事例などから、鉄生産の拠点が当地にあったと推測されている。

<平安時代> 長者原遺跡、名和衣装谷遺跡、名和乙ヶ谷遺跡などがある。長者原遺跡では礎石建物やこれに伴う区画溝、大量の炭化米が出土しており、正倉と推定されている。名和衣装谷遺跡では大型掘立柱建物跡が2棟検出され、鉄滓・緑釉陶器・灰釉陶器も出土した。郡司層の居宅もしくは郡衙下部の鉄生産に関わる遺構と想定されている。茶畑六反田遺跡で条里区画の一部とみられる溝が検出されている。主軸はほぼ南北方向をとるもので、緑釉陶器や墨書土器が出土した。

5 鎌倉～室町時代

中世の遺跡には、茶畑六反田遺跡、文殊領屋敷遺跡、押平弘法堂遺跡などがある。いずれの遺跡でも鎌倉時代後半に居住域から生産域へと変遷している。門前上屋敷遺跡では、屋敷地を区画すると考えられる大溝が検出された。『太平記』で知られる名和長年ゆかりのものと伝承される旧跡が多数存在するが、考古学資料からそれを裏付けるものはない。富長城跡や長野城跡などの城跡も残る。門前礎石群は礎石建物跡と推定され、白磁・青磁・染付などの出土から中世以降の寺院跡と推測されている。

6 近世以降

寛永9(1632)年に池田光仲が鳥取藩主となり、幕末まで池田氏の藩政となる。御来屋は伯耆街道の宿駅、藩の運上米の積出港として重要な位置を占めた。明治35(1902)年、山陰鉄道が境～御来屋間を結ぶ。当時設置の塚根川橋梁は現役で運用されるほか、旧阿弥陀川橋梁跡や陸軍軍馬補充部大山支部跡などの近代遺跡も少なからず残っている。 (日置)

【参考文献】

名和町誌編纂委員会編1978年『名和町誌』 名和町誌編纂委員会

辻信広2003年『鳥取県西伯郡名和町 押平弘法堂遺跡 押平天王屋敷遺跡 茶畑山道遺跡』 名和町教育委員会

鳥取県埋蔵文化財センター編1986年『鳥取県の古墳』 鳥取県教育文化財団鳥取県埋蔵文化財センター

鳥取県埋蔵文化財センター編1988年『旧石器・縄文時代の鳥取県』 鳥取県教育文化財団鳥取県埋蔵文化財センター

鳥取県埋蔵文化財センター編1989年『歴史時代の鳥取県』 鳥取県教育文化財団鳥取県埋蔵文化財センター

第2章 位置と環境

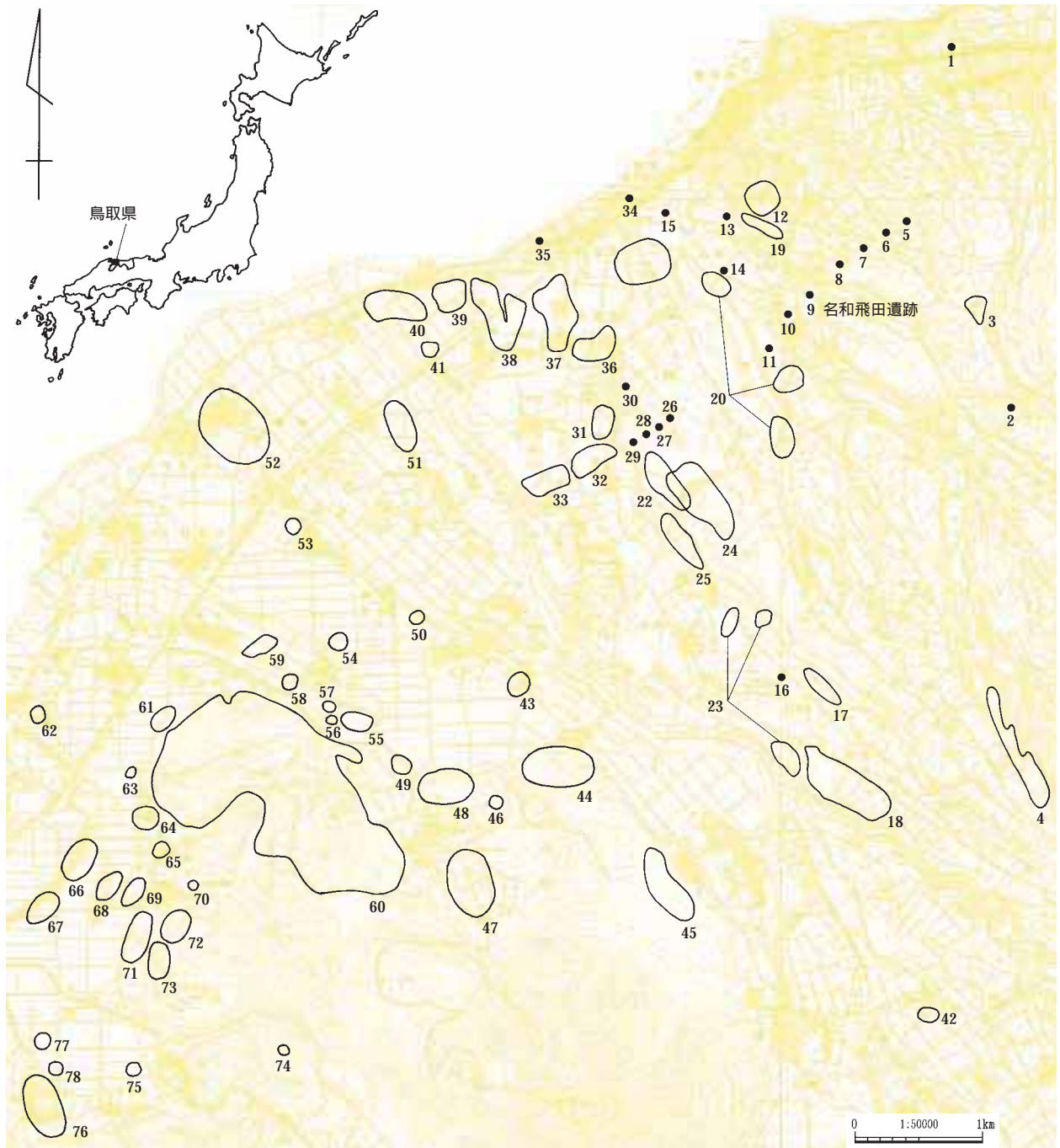


図2 周辺の遺跡
表1 周辺遺跡一覧表

遺跡名		遺跡名		遺跡名		遺跡名	
1	龍光寺堀遺跡	17	高田第4遺跡	33	押平弘法堂遺跡	49	客尾山古墳群
2	栃原窯跡	18	高田第10遺跡	34	荒田遺跡	50	清原遺跡
3	角塚遺跡	19	坪田古墳群	35	富長城跡	51	上野遺跡群
4	上大山第1遺跡	20	門前古墳群	36	文殊領屋敷遺跡	52	国信遺跡
5	名和中畝遺跡	21	富長山村古墳群	37	古御堂遺跡	53	唐王遺跡
6	名和小谷遺跡	22	茶畑古墳群	38	大塚塚根遺跡	54	新田原遺跡
7	名和衣装谷遺跡	23	高田古墳群	39	大塚岩田遺跡	55	塚田遺跡
8	名和乙ヶ谷遺跡	24	茶畑第2遺跡	40	大塚第3遺跡	56	荘田古墳群
9	名和飛田遺跡	25	東高田遺跡	41	大塚屋敷遺跡	57	原畑遺跡
10	門前上屋敷遺跡	26	古御堂金蔵ヶ平遺跡	42	蔵岡第1遺跡	58	大道原遺跡
11	門前第2遺跡	27	古御堂笹尾山遺跡	43	中高遺跡	59	妻木法大神遺跡
12	長者原遺跡	28	押平尾無遺跡	44	平古墳群	60	妻木晩田遺跡
13	八ノボ塚古墳	29	茶畑第1遺跡	45	宮内古墳群	61	富岡播磨洞遺跡
14	門前礎石群	30	原3号墳	46	徳楽方墳	62	今津岸ノ上遺跡
15	南川遺跡	31	茶畑山道遺跡	47	源平山古墳群	63	安原溝尻遺跡
16	高田原廃寺	32	茶畑六反田遺跡	48	長田古墳群	64	晩田遺跡
						65	下埜遺跡・宮廻遺跡
						66	福岡遺跡
						67	井手跨遺跡
						68	瓶山古墳群
						69	向山古墳群
						70	上淀廃寺
						71	彼岸田遺跡
						72	小枝山古墳群
						73	城山古墳群
						74	四十九谷横六墓群
						75	稲吉角田遺跡
						76	中西尾古墳群
						77	鮎ヶ口遺跡
						78	河原田遺跡

第3章 調査の概要

第1節 遺跡の概要

本遺跡は名和川東岸の低位段丘上に立地する。遺跡の北側には東谷川が西に流れ、遺跡の北西で名和川と合流する。河川べりに形成された遺跡のため、遺跡内の土壌の堆積は河川の沖積作用によるものが中心となる。また、河川の合流点に立地することから、調査地内には複雑な堆積を見せる部分がある。標高は名和川に近い西側ほど低く調査前で29m前後、南東から迫る丘陵に近い調査地東部が調査前で31m前後を測る。

調査地は橋脚建設予定地部分2箇所（第1・2調査地）と、県道をはさんで西側の盛土工事部分（第3調査地）に分かれている。第1調査地は遺跡の北東部分にあたる。調査では遺構や遺物包含層は確認できず、厚い客土の下に東谷川の河川堆積による砂礫層を確認して調査を終了した。第2調査地は地形の改変が調査地内では最も少なく、遺存状態はよかった。4面の遺構面を確認し、土坑やピットを検出した。厚く堆積した遺物包含層からは古墳時代中期～後期の遺物や縄文時代の遺物が多量に出土している。第3調査地は本調査の中心部分で、平面積で8,000㎡あまりを調査した。

表2 新旧地区対照表

報告時地区名	調査時地区名	報告時地区名	調査時地区名	報告時地区名	調査時地区名
第1調査地	1区	第3調査地A区	4区	第3調査地C区	7区・8区
第2調査地	2区	第3調査地B区	3区	第3調査地D区	5区
				第3調査地E区	6区

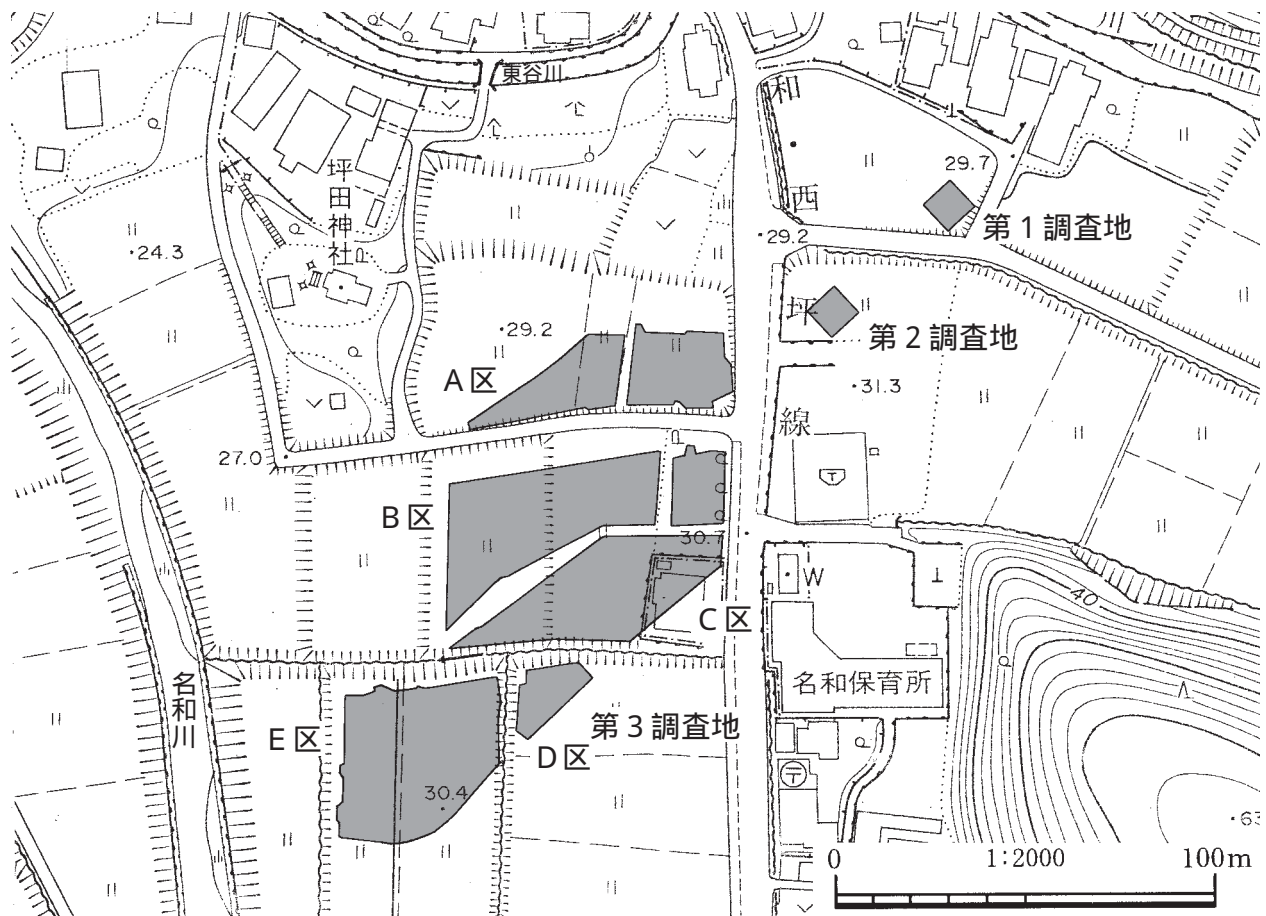


図3 名和飛田遺跡地区配置図

第3章 調査の概要

この部分では圃場整備が行われており、全面に渡って地形が改変されていた。遺存状態の悪い部分も多かったが、中世のピット、古墳時代中期末～後期末の竪穴住居や掘立柱建物などを中心とする第1遺構面と、弥生中期～後期の竪穴住居や竪穴、縄文時代の土坑を中心とする第2遺構面の、二つの遺構面を確認した。調査面積は全調査区的全遺構面を合計して16,631m²、出土遺物量はコンテナにして約90箱分である。 (北)

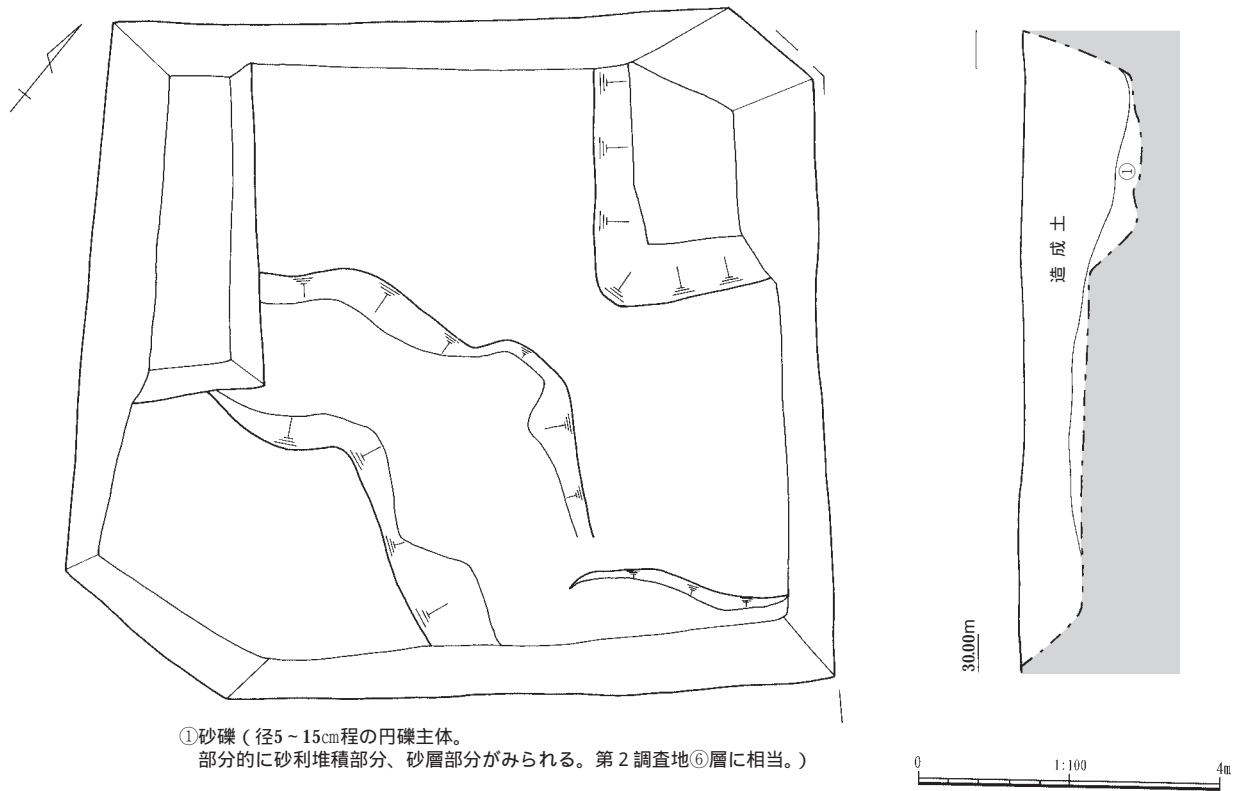
第2節 調査の経過と方法

水田として利用されていた第3調査地内は農道や水路が通り、田圃の畦区割りによって分割されていたため、これを調査時に6つの地区に分け、着手順に3～8区と呼称して調査した。本書ではこれらをA～E区と振り替えて報告する(表2参照)。2003年度は第1調査地と第2調査地、第3調査地の北半部分(A・B区)と南半部分の一部(D区の一部)、2004年度は第3調査地南半部(C・D・E区)を調査した。第3調査地では公共座標第 系にしたがった10m四方のグリッド(方眼)を設定し、方眼軸名は南北軸を北からアルファベットで、東西軸を東から数字で示した。各グリッドの名称は北東隅の交点のアルファベットと数字を組み合わせで表すこととした。第1調査地、第2調査地は10m平方の小さな調査地であったためグリッドは設定していない。調査はまず表土剥ぎを重機で行い、トレンチを掘削して土層の堆積と遺構検出の可能な面を確認した。その後遺構面の検出、遺構の掘り下げ、完掘、記録作業を行った。検出した遺構の測量作業はグリッド交点に打設した方眼杭を基準に主にトータルステーションを利用して行った。出土遺物は遺構内出土のものや包含層中の残存状態のよい個体に関してはトータルステーションなどで出土状況・出土位置を図化して取り上げた。包含層中のその他の遺物はグリッドおよび土層単位で一括して取り上げている。現場での写真撮影には6×7版および35mmのカラーポジ、モノクロネガフィルムをそれぞれ使用した。2003年度は5月2日に現場調査を着手し10月14日に現場作業を終了し室内整理作業に入った。2004年度は4月17日に調査を開始し、11月19日に現地での作業をすべて終了し、整理作業、報告書作成作業に入った。なお、遺構の掘り下げがほぼ終了した10月2日には名和中畝遺跡と合同で現地説明会を開催し、あいにくの雨天にもかかわらず県内外から約30名の参加者を得た。(北)

第4章 第1調査地・第2調査地の調査

第1節 第1調査地(図4、図版4)

第1調査地は橋脚建設予定地部分の東側の調査地で、遺跡の北東部分に位置する。調査範囲内では最も東谷川に近い位置になる。調査地は10m四方の方形に設定した。造成土下で、砂や砂利と径5～15cmの礫で構成された河川堆積によると考えられる層を確認した。全面でこの層を検出した後、部分的にこの砂礫層に深掘りを行ったが、遺物等を確認できなかったため調査を終了した。この砂礫層は東谷川の河川堆積で形成されたと見られ、第2調査地の⑥層に対応する可能性が高い。ただし、第2調査区⑥層には多量の縄文土器などが含まれていたが、第1調査地内では確認できていない。遺物の平面的な分布が異なっていたものと考えているが、同じ砂礫層でも堆積過程や堆積時期が違う可能性もある。造成土中から土師質の土器や須恵器、陶磁器などの小片が少量出土している。(北)



①砂礫（径5～15cm程の円礫主体。
部分的に砂利堆積部分、砂層部分が見られる。第2調査地⑥層に相当。）

図4 第1調査地完掘平面図および土層断面図

第2節 第2調査地

1. 概要

第2調査地周辺は現況で周辺よりも1mほど段状に高くなっている。北側と西側は道路で大きく削り取られている。東側と南側では地形の改変はさほど大きくないようで、南には南東方向から延びてくる丘陵が迫り、東には東谷川によって形成された細い谷が続いている。

調査は、調査地が10m平方と狭く、また砂を中心とした脆弱な地盤であったため安全を考慮し、掘削深度にしたがって階段状に控えをとって調査する面積を狭くしていくこととした。掘り下げが表土下約3mに達した段階で、掘削深度に対して安全な面積を確保することが出来なくなったため、縄文時代の遺物を含む⑥層掘削の途中で調査を終了せざるを得なくなった。遺構面を4面確認したほか、④層で古墳時代中期～後期の遺物包含層、⑤・⑥層で縄文時代の遺物包含層を確認した。（北）

2. 調査地内の堆積（図5、図版6）

表土下に鉄分の沈着層がみられ、この下に灰色系の粘質土が2層、さらにその下位に黒褐色の粘質土が1層みられる。この上層部分の堆積は土壌化の著しい粘質土の水平堆積である。④層以下は河川堆積と見られ、砂質の強い土層や砂礫層を中心とする。④層は黒褐色のやや砂質の強い土層、⑤層は砂質土層で調査地の西端に堆積する。⑥層は砂、砂利、径5cm～15cmほどの円礫で構成される層で部分的にラミナ状の堆積が確認できる。第1遺構面を②層上面で、第2遺構面を③層上面で、第3遺構面を④層上面で、第4遺構面を⑤・⑥層上面でそれぞれ検出した。（北）

3. 第1遺構面（図6、図版4・5）

①層下、②層上面で検出した。遺構は土坑3基とピット

表3 第2調査地内新旧遺構対照表

報告時遺構名	報告時遺構名
土坑1	S K 1
土坑2	S K 2
土坑3	S K 3

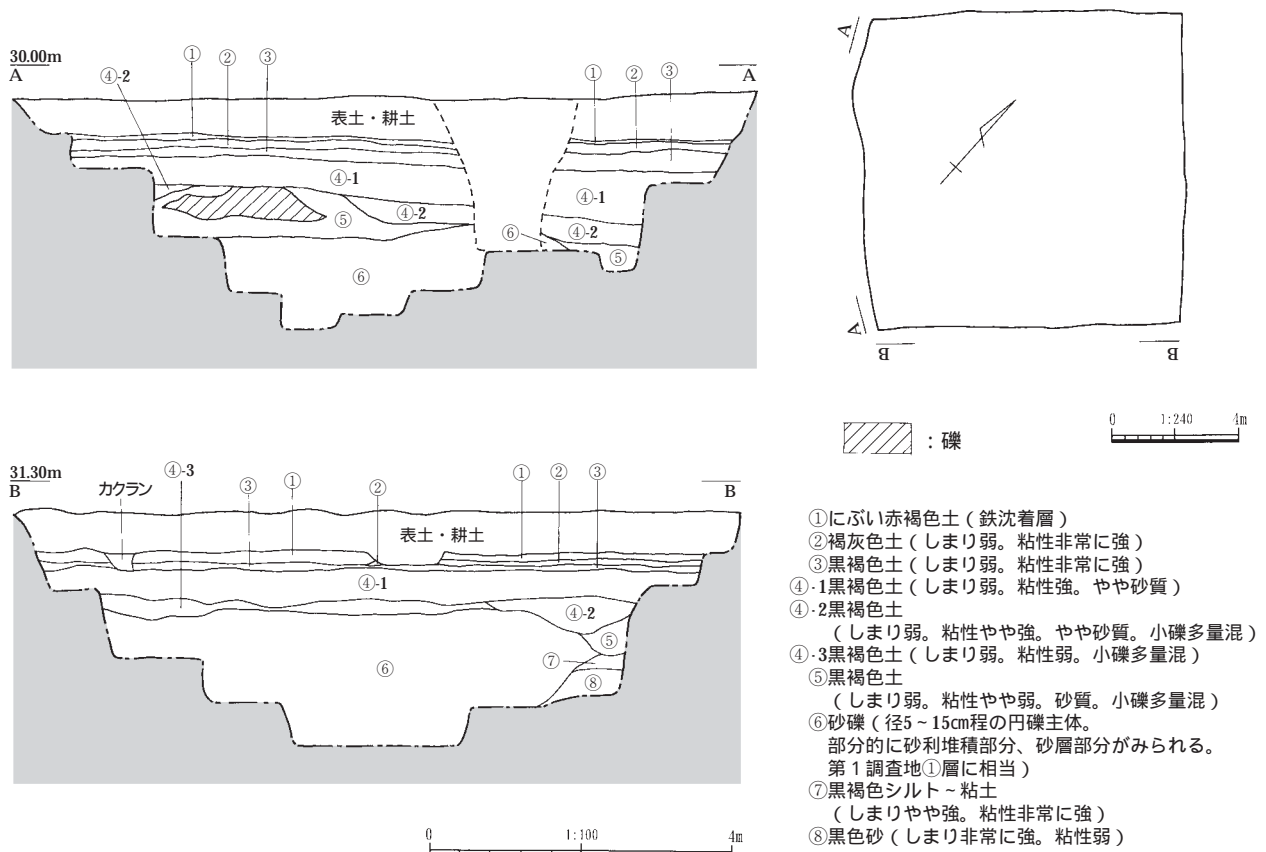


図5 第2調査地内土層断面図

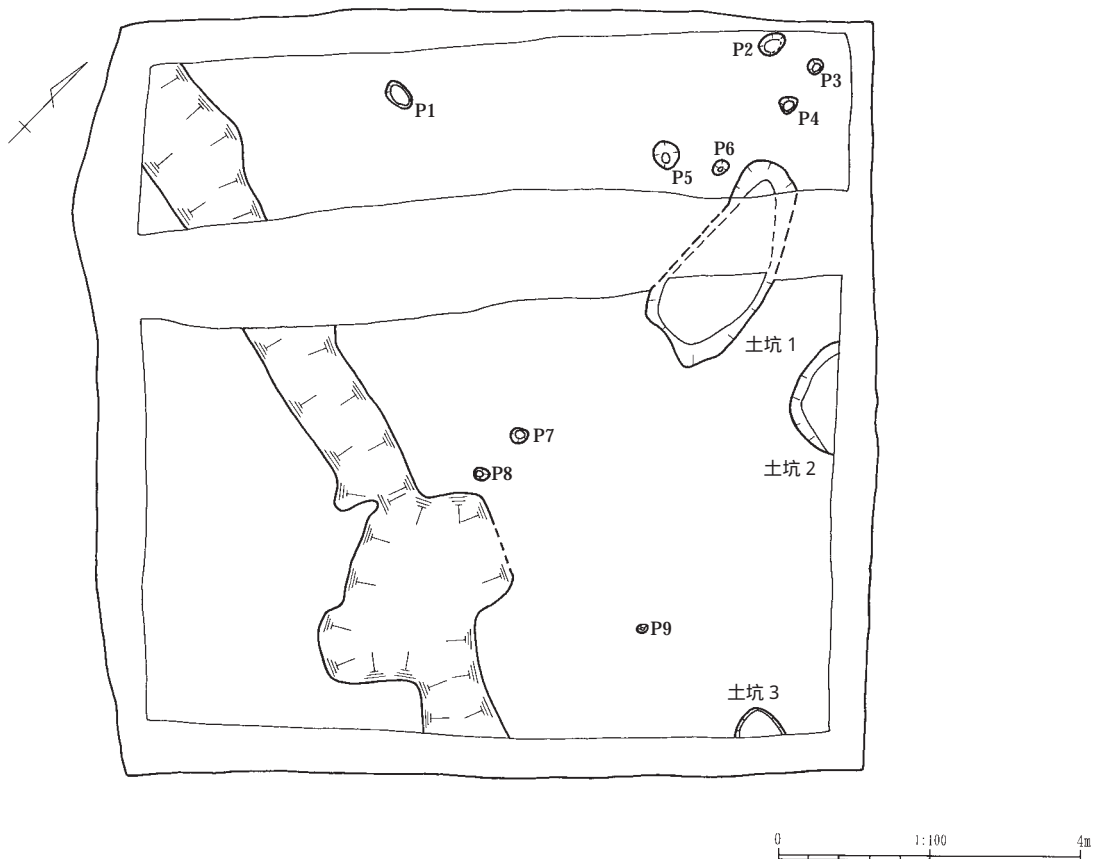


図6 第2調査地 第1遺構面

表4 土坑1～3計測表

土坑	長径×短径 (cm)	深さ (cm)
土坑1	298×120	41
土坑2	147×(53)	49
土坑3	56×(24)	17

9基である。遺構はいずれも暗灰褐色の粘質土に覆われている。上面を覆う①層からは古墳時代の土師器や縄文土器の小片などの遊離資料しか出土していない。②層中には12～13世紀ごろのものと思われる高台をもつ土師器の杯の小片などがわずかに含まれており、これが②層包含の最新遺物である。したがって、第1遺構面は中世以降の所産ということになるだろう。(北)

土坑1(図7、図版4・5、表4)

土坑の大部分が名和町教育委員会試掘調査時のトレンチと重複する。平面形が不整な長楕円形、断面は逆台形を呈する。基盤層と同様に土坑の埋土も土壌化が著しい。古墳時代に帰属すると思われる土師器や須恵器の小片、細片がいくらか含まれていたが、④層中に包含されていた遺物を土坑掘削時に巻き上げたものと思われる、この土坑の時期のものではない。町教育委員会試掘調査時には本土坑から「開元通宝(?)」として報告されている貨幣が出土している(辻2004 p.32)ので、中・近世の遺構である可能性が高い。

土坑2(図7、図版5、表4)

土坑1の東側に並ぶが、土坑の大部分が調査地外にあり、土坑の規模、形状は不明である。埋土は小礫を含み、基盤層と同様に土壌化が著しい。遺物は出土せず、土坑の機能や時期は不明である。

土坑3(図7、図版5、表4) (日置)

土坑の大部分は調査地外にのびており、土坑の規模、形状とも不明である。底面よりやや浮いて亜角礫が出土したが、土坑の機能や時期は不明である。(日置)

4. 第2遺構面(図8、図版5)

②層下、③層上面で検出した。遺構はピットを3基確認したのみである。ピットはいずれも②層

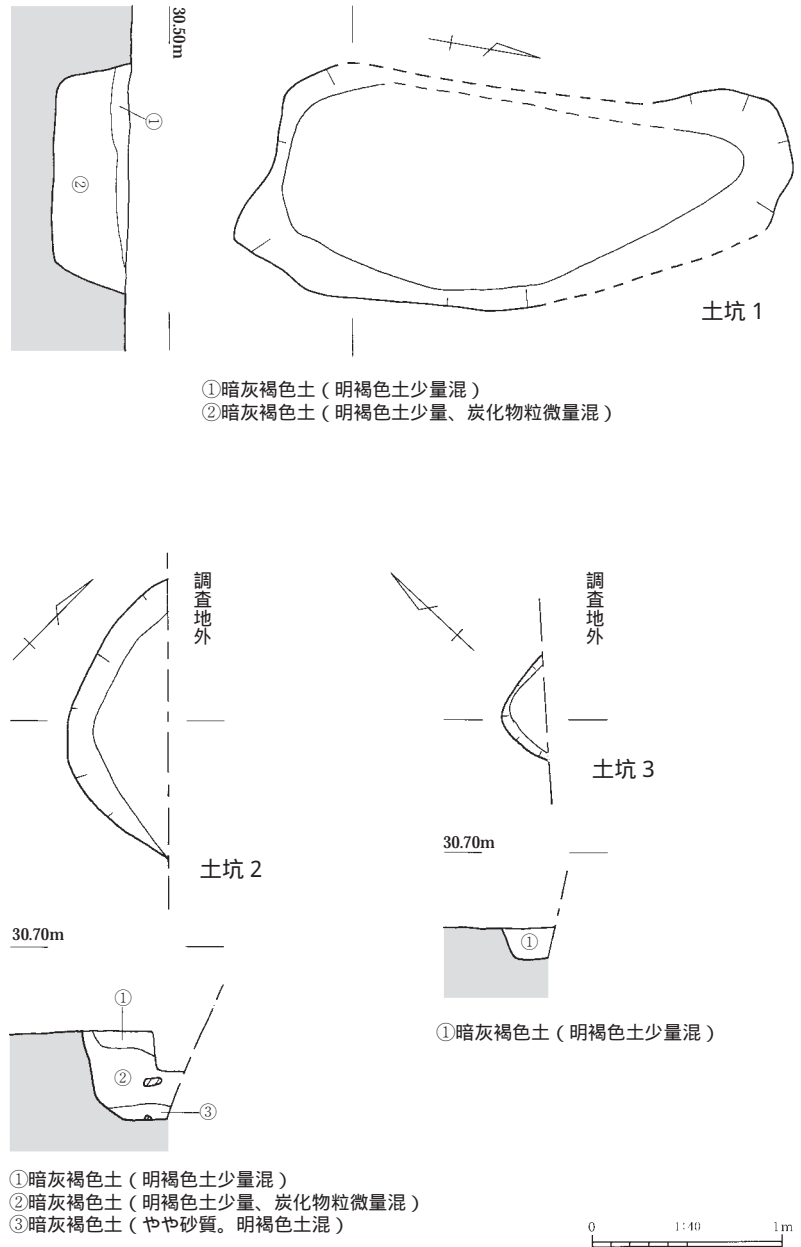


図7 土坑1～3

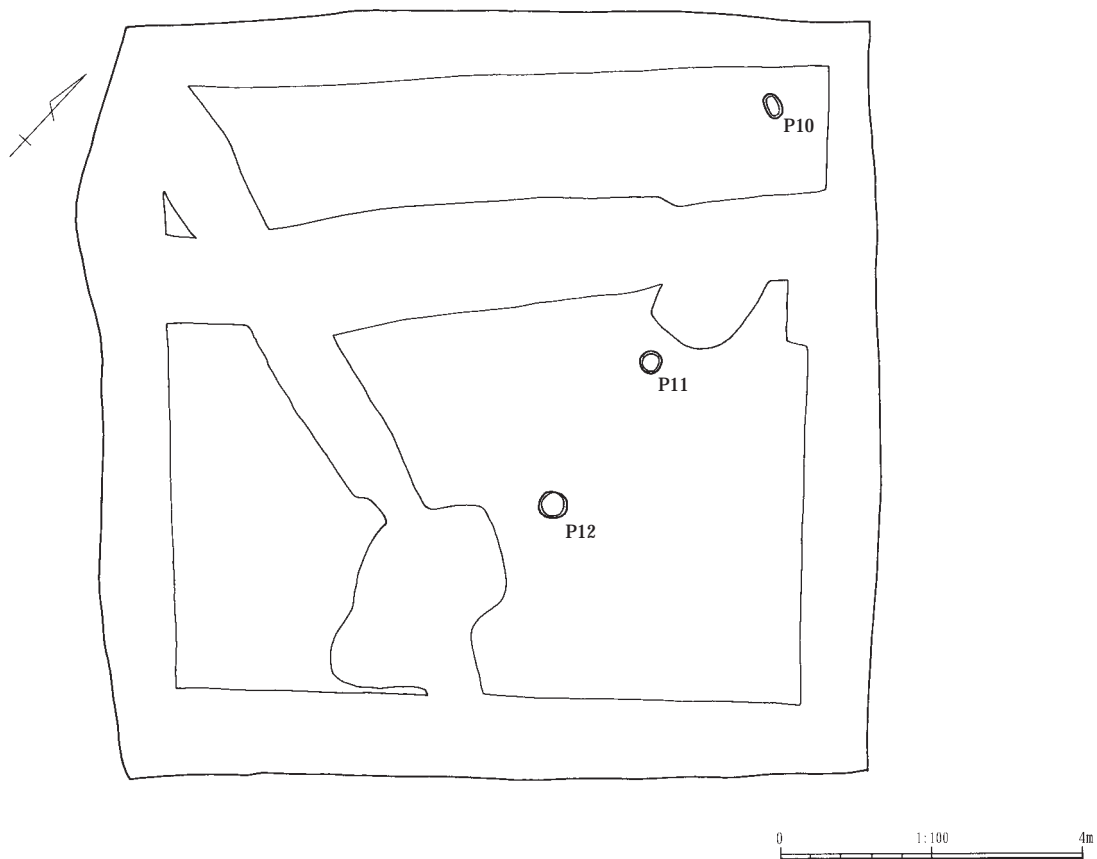


図8 第2調査地 第2遺構面

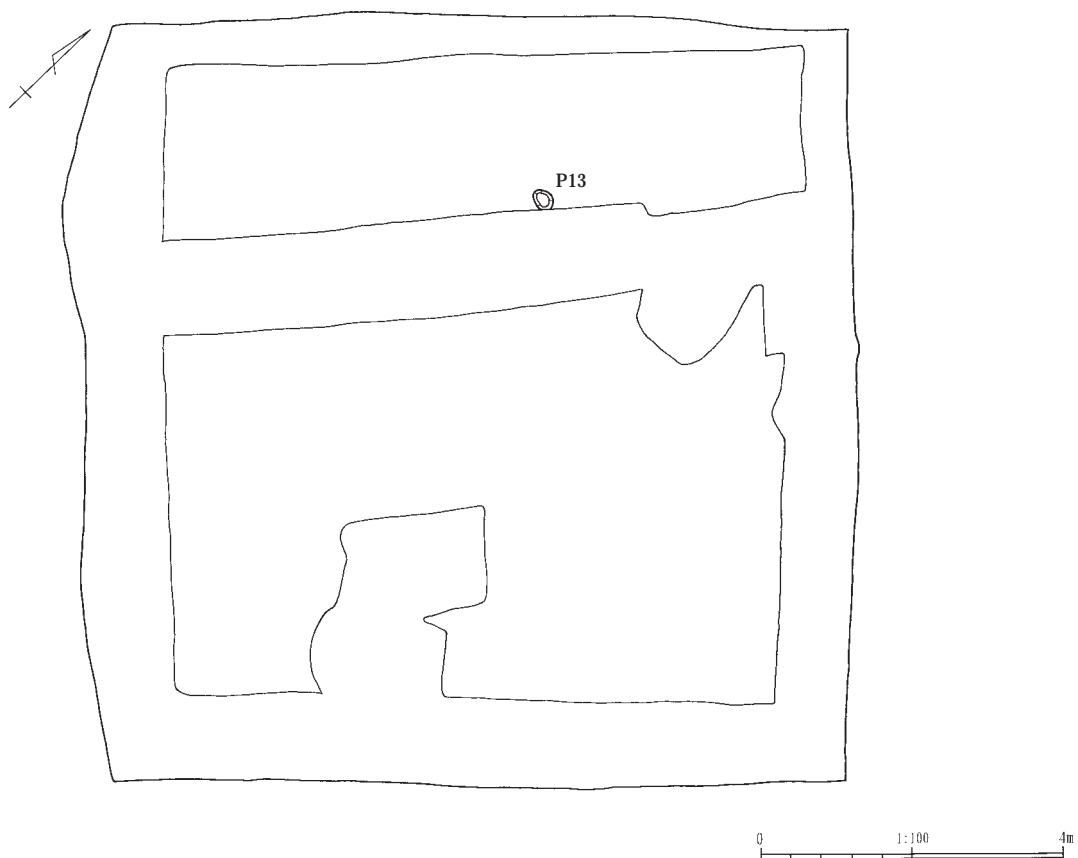


図9 第2調査地 第3遺構面

起源と考えられる褐灰色土を埋土としている。この遺構面の時期は、②層の遺物から12～13世紀以前のもと言える。③層には④層からの遊離資料と思われる古墳時代の土師器、須恵器の小片、細片がいくらか見られたのみで、遺構面の時期の上限を決める遺物は出土していない。 (北)

5. 第3遺構面 (図9、図版5)

③層下、④層上面で検出した。遺構はピット1基のみ。遺構面の時期は④層包含の最新遺物が古墳時代後期であることから、これ以降のものと考えられる。③層には先述のようにプライマリーな状態の包含遺物がないため、時期の下限は不明である。 (北)

6. 第4遺構面 (図10、図版6)

④層下、⑤層または⑥層上面で検出した。ピット2基と調査区西端部で段状の落ち込みを確認した。この落ち込みは西側が調査範囲外に続いており、形状や規模は判然としないが、南端部で立ち上がりが確認できるので、溝状遺構をなす可能性が高い。溝状遺構とした場合、南東から北西に向けて伸びるものと想定できる。これが人工的なものか、自然のものか、判定する情報に乏しいが、いずれにしても地形の高低軸に沿った方向に走っているようである。これらの遺構は④層とほぼ同質の黒褐色土を埋土としている。

遺構面の時期は、基盤層である⑥層は縄文後期中葉の土器を最新遺物として包含しているので、これが上限となる。また、この面を覆う④層中から、古墳時代中期末から後期にかけての遺物が多く出土している。時期的にまとまった遺物が多数出土している点や、これらの遺物の遺存状態が良好である点から、④層の遺物が第4遺構面に伴う可能性が高いと思われる。したがって、第4遺構面は古墳時代中期末～後期にかけて形成されたものであろう。 (北)

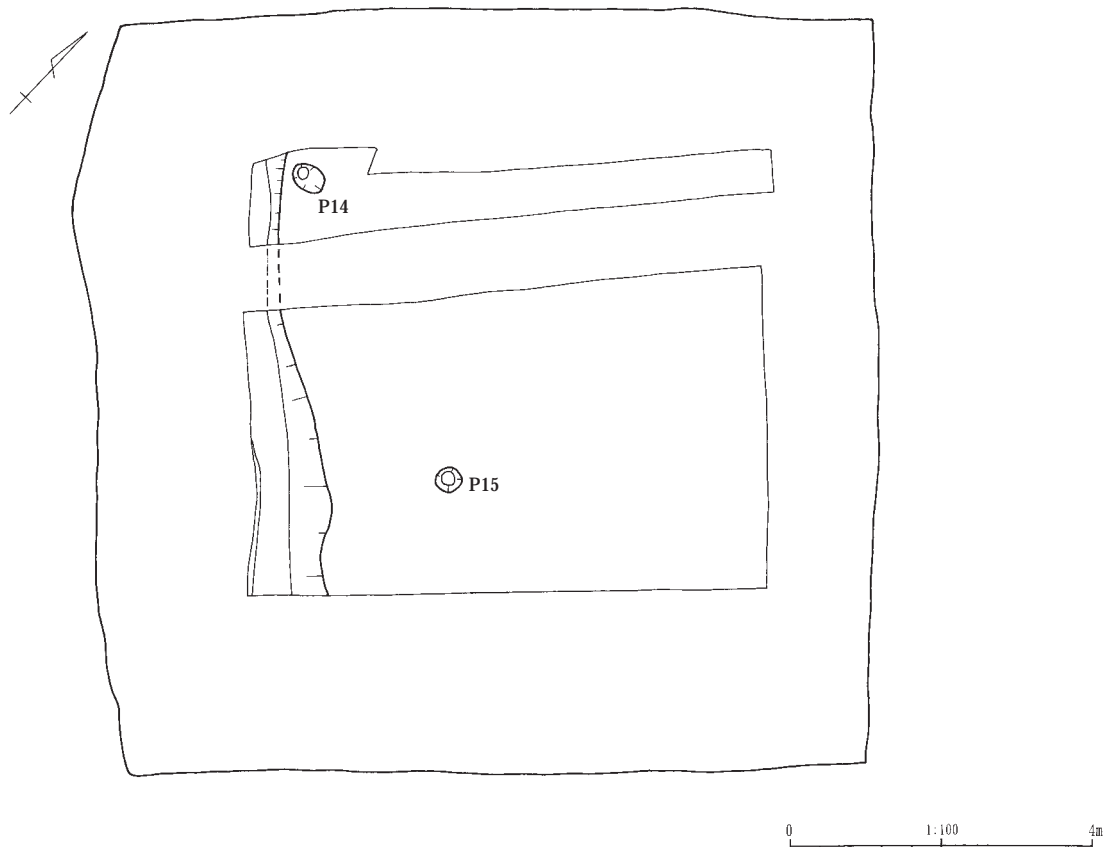


図10 第2調査地 第4遺構面

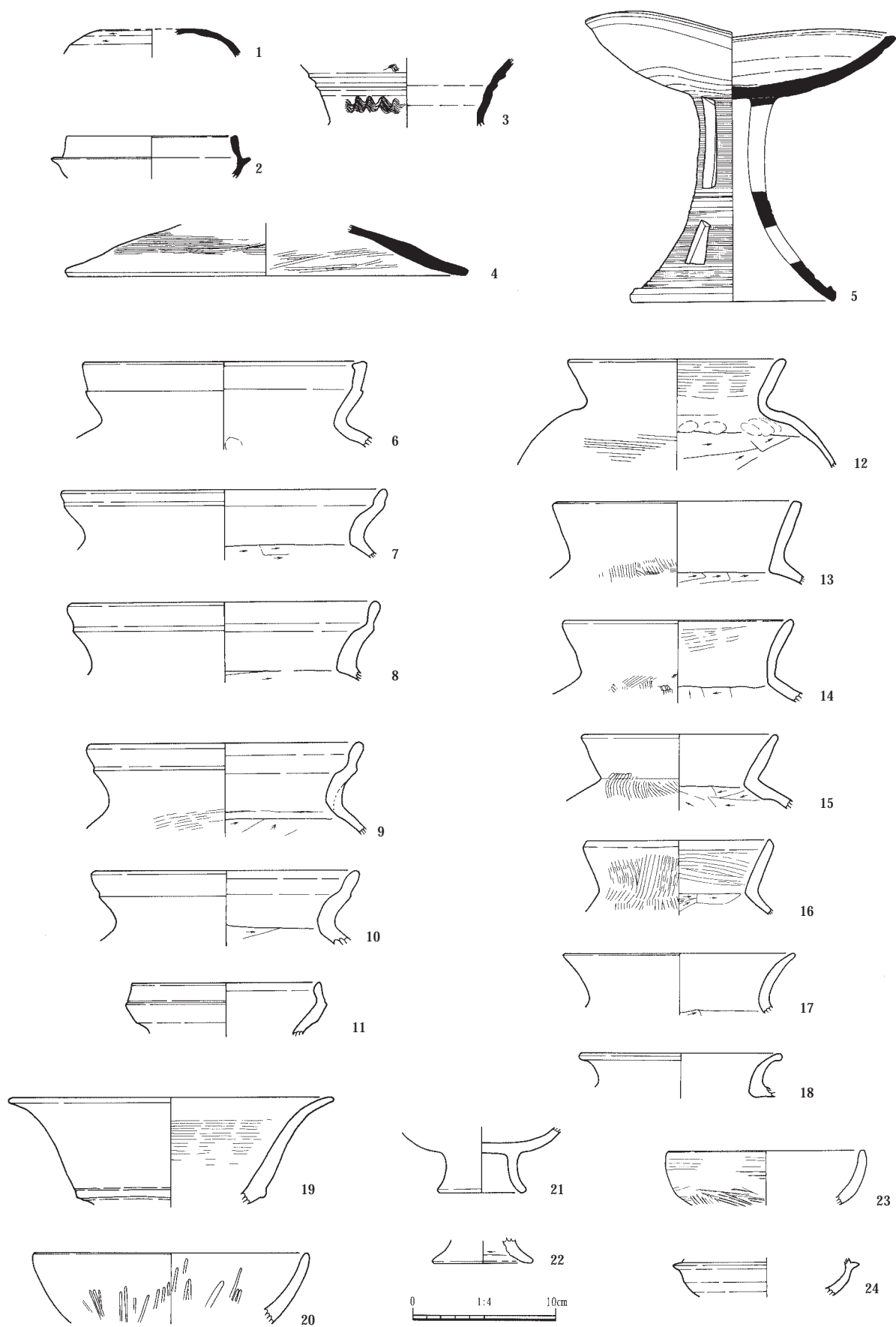


図11 第2調査地 第4遺構面 遺構外出土遺物(④層出土)

遺構外の遺物（図11、図版47・50、表34）

第4遺構面遺構外出土の遺物として④層の遺物を示した。④層出土遺物は古墳時代中期末から後期にかけての須恵器や土師器が中心になる。1～5は須恵器。1は杯蓋で、2は杯身。3は壺頸部片。4は大型の皿状を呈す器形で、蓋と思われる。外面にはカキメが施される。焼成があまく風化が著しい。5は大型の無蓋高杯で、杯部が皿状をなし、長脚で2段、3方透かしが施される。古墳時代後期後葉ごろのものであろう。6から24は土師器で、古墳時代中期末に帰属するものが中心となる。6～11は複合口縁の甕で、いずれも中期末ごろのもの。12～18は単純口縁の甕で、12～16は中期末ごろ、17・18は後期のものであろう。19・20は高杯の杯部。21・22は低脚杯。23は碗。24は蓋杯の杯身。

（北）

7. ⑤・⑥層出土遺物（図12～16、図版48・49、表47・48・59）

⑤・⑥層からは縄文時代の遺物が多く出土した。⑤層は黒褐色砂質土、⑥層は砂礫層で、当初は河川堆積による基盤層と判断していたが、縄文土器や石器が出土したため遺物包含層として掘り下げを続行した。ただし、前述のとおり掘削深度が安全許容の限界に達したため、これを掘りきることなく調査を終了した。砂礫層は東谷川の堆積作用によって形成されたものと思われる。遺物は当時の河川べり付近に残されたものが二次堆積したものであろう。この堆積はラミナ状の互層堆積を見せる部分があることから、一時的な堆積で短期間に形成されたものではないと思われる。したがって、二次堆積といっても上流から一気に押し流されてきたものではないと思われ、比較的遺物の移動は少ない可能性が高い。土器の遺存状態も若干摩滅したものもあるが、概して良好であった。

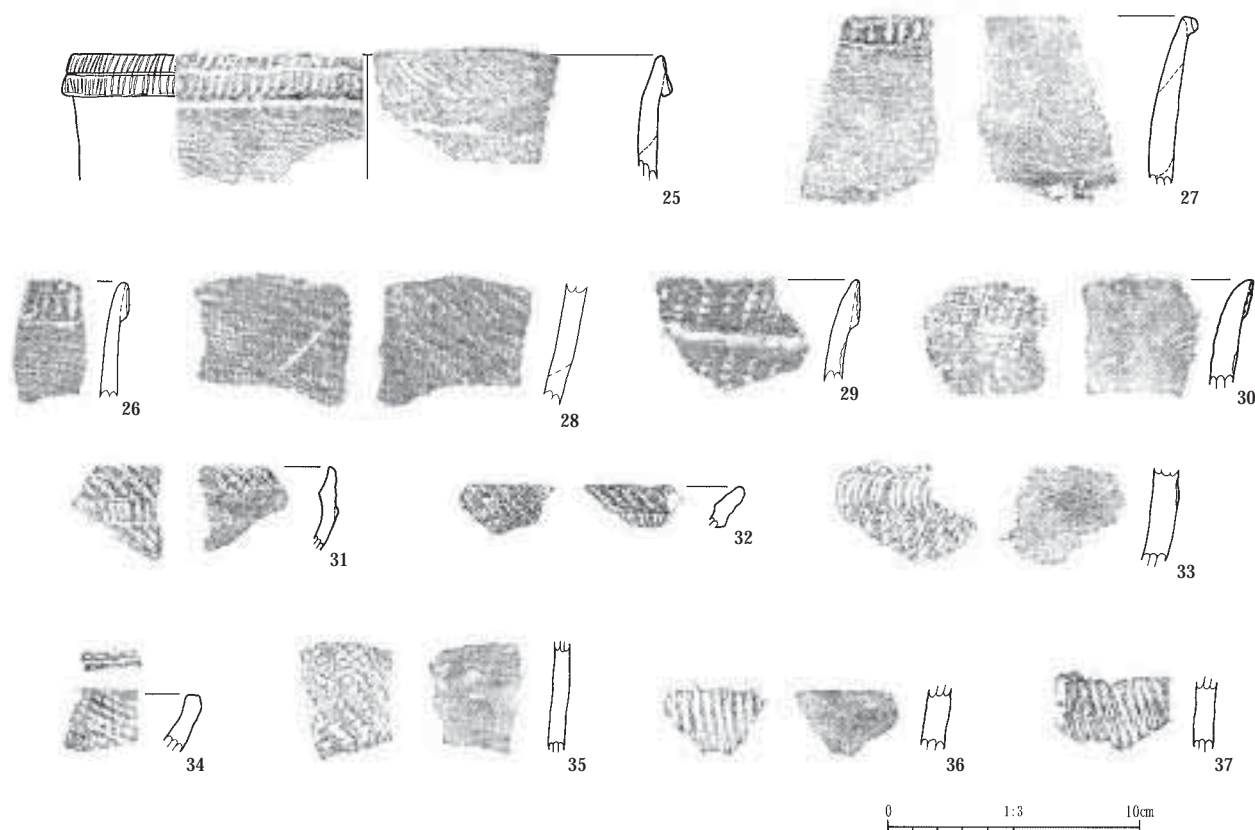


図12 第2調査地 ⑤・⑥層出土縄文土器〔1Ⅰ早期～中期〕

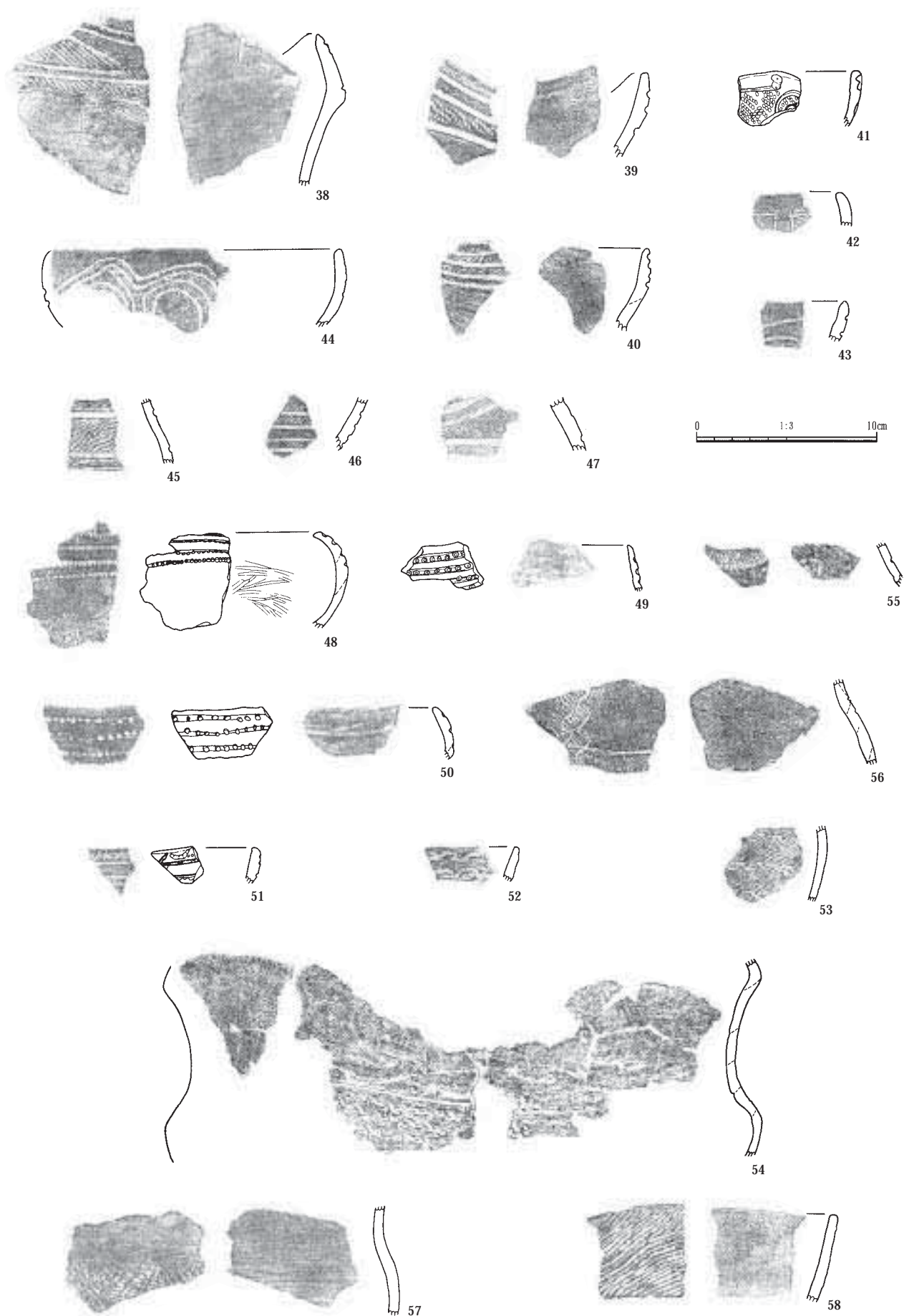


図13 第2調査地 ⑤・⑥層出土縄文土器〔2〕後期〕

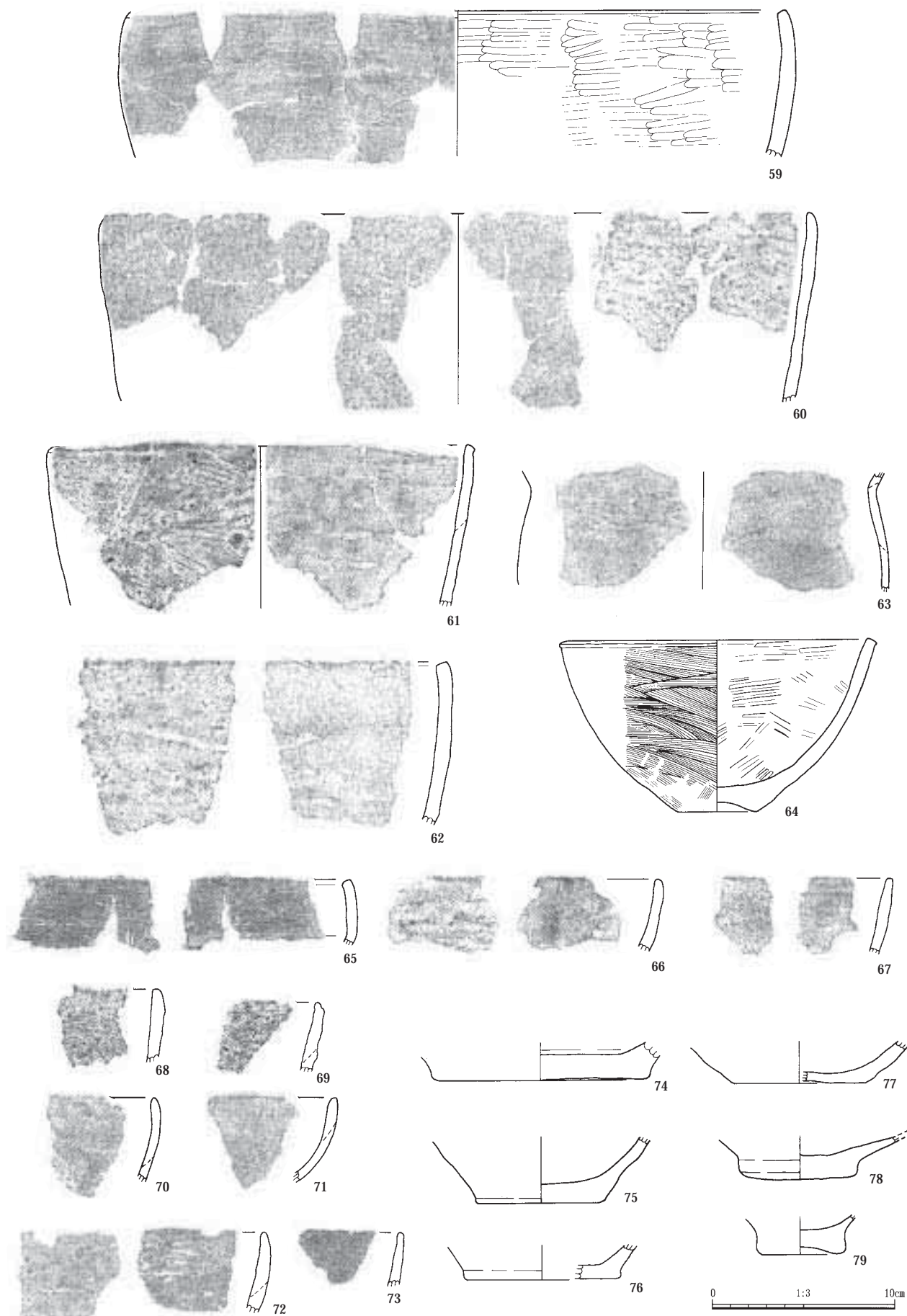


図14 第2調査地 ⑤・⑥層出土縄文土器(3) 粗製土器・底部]

縄文土器（図12～14、図版48・49、表47・48）

縄文土器は早期後葉から後期中葉までのものが出土している。出土した土器は破片数にして863点で、内訳は早期後葉のものと思われる表裏縄文土器1点、早期末・前期初頭の隆帯文土器9点、前期初頭（西川津式）7点、前期後葉（彦崎Z2式～大歳山式）4点、中期初頭（鷹島式）1点、中期（船元式）8点、後期中葉の有文土器61点、後期に帰属すると思われる粗製土器が770点である。粗製土器が圧倒的に出土量の主体をなす。これ以外では後期中葉土器が中心となる。後期の粗製土器も有文土器と同じ時期のものと思えば、出土土器の全体の9割以上が後期中葉のものとなり、比較的時期的なまとまりをもつと言える。

図12には早期から中期にかけての土器を示した。25～28は胎土に繊維を混入する早期後葉～前期初頭の土器である。25～27は早期末・前期初頭の「長山式」（井上1991・1996）あるいは「福呂式」・「長山馬籠式」（小林2000）の深鉢である。この一群は第3調査地で大量に出土している。25・26は外面の地文に節の細かいRL縄文を施す。25は口縁端の下部に隆帯を貼り付けた後、口縁端と隆帯を工具でなでつけて断面三角形に成形し、口縁端から隆帯にかけてキザミを施しており、隆帯と口縁端部の一体的な調整、施文がなされている。26は口縁端部に幅広で低めの隆帯をもつ。27の外面は条痕調整で、口縁端に隆帯をもつ。28は表裏にRL縄文を施しており、早期後葉の菱根式と考えられるが、出土したのはこの1点のみのため、まとまった量の出土を見た早期末の外面縄文施文土器に伴う可能性もあるかもしれない。29・30は前期初頭の西川津式A類で、いずれも口縁端に幅広の隆帯をもち、隆帯上とその下を二枚貝の腹縁で刺突している。31・32は早期末の大歳山式の深鉢口縁。33は節の長いLR縄文を地文に、爪形のキザミを施す中期初頭の鷹島式の深鉢。34～37は外面に縄文を施すもので、中期船元式の範疇に入るものである。

図13には後期の有文土器を示した。いずれも中葉のものであるが、古相の四元式併行期ないしは「沖丈式」（千葉2001）の段階と、新相の彦崎K2式の段階の2時期にわたると考えられる。38～47は沈線と充填縄文で施文するもの。多くは古相の特徴をもつが、45・46は器壁が薄く、沈線が浅いことから新相のものであろう。44は浅鉢、ほかは深鉢と思われる。48～50は横走る複数条の沈線を施し、沈線内に連続刺突を施している。施文の特徴から新相に位置づけられる。48・50は浅鉢、49は深鉢ないしは浅鉢である。51～54は結節縄文を施すもので、これらも新相のものである。51は外面にわずかに赤色顔料が付着する。54は胎土、調整が粗雑な深鉢で、頸部は無文、胴部屈曲部上に沈線を施し、これ以下に横位の結節縄文を施す。55・56は注口土器で、いずれも新相のものであろう。55は注口の付け根部分の破片で、付け根部にキザミがめぐる。56は外面を丁寧に磨き、縦位に結節縄文を施しており、一乗寺K式の特徴をもつ。57は縄文のみを施すもので、頸部は無文、胴部にRL縄文を異方向に施す。58は外面に無節縄文を施す粗製深鉢である。

図14には無文粗製土器と後期土器の底部を示した。本調査区から出土した後期の有文土器は中葉のもののみで、晚期土器は皆無であることから状況から、粗製土器のほとんどは後期中葉に帰属するものと思われる。多くがバケツ形の深鉢である。63は頸部が屈曲するタイプ。64は外面に細密条痕を施す鉢形土器である。底部は平底のものが多いが、凹み底のものも1点ある。（北）石器（図15・16、表5・59）

石器は全部で354点出土している。器種、石材の内訳は表5のとおりである。剥片石器の石材は黒曜石と硬質安山岩が利用され、前者が87%の比率を占める。器種別に見ると主体となるのは剥

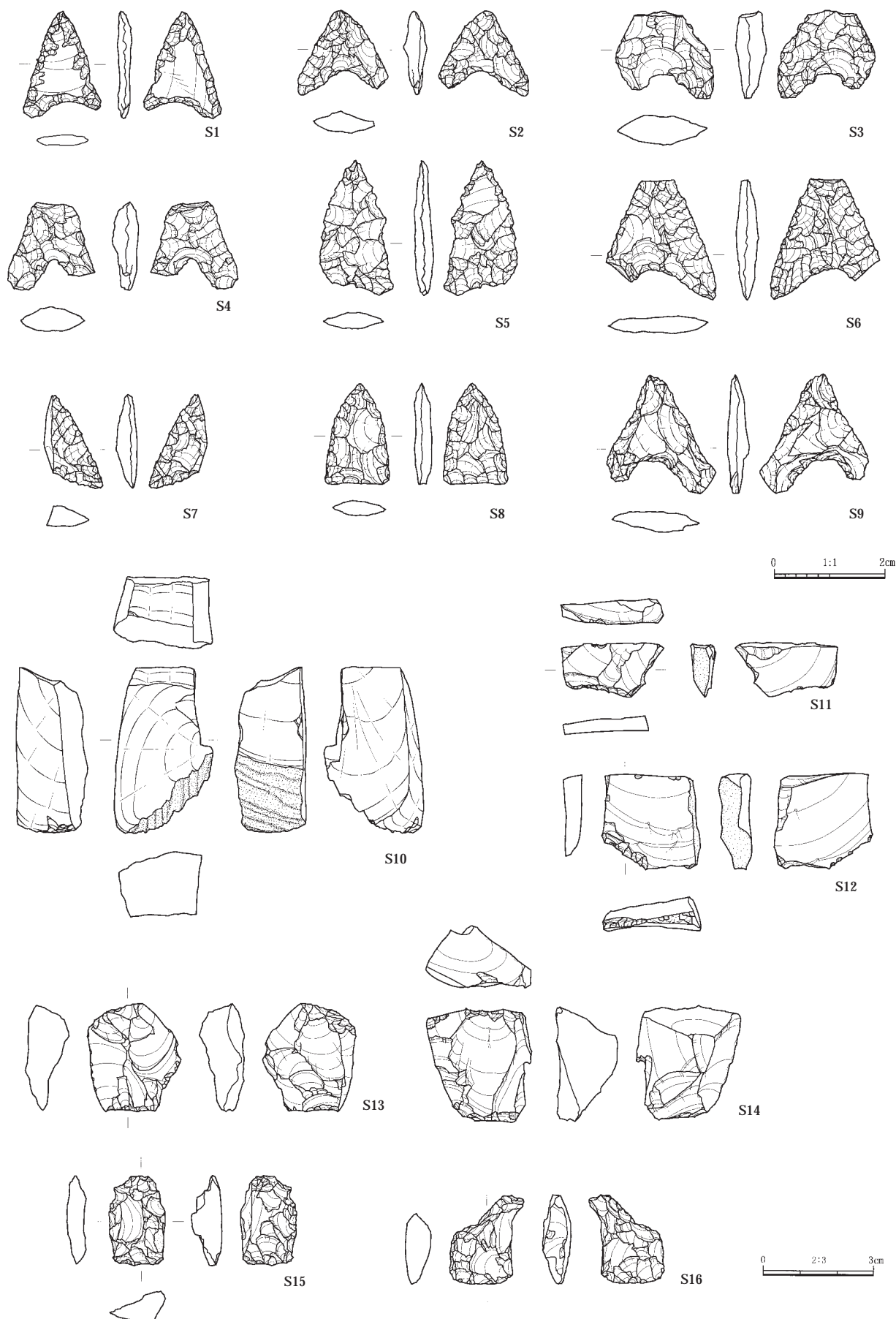


図15 第2調査地 ⑤・⑥層出土石器(1)

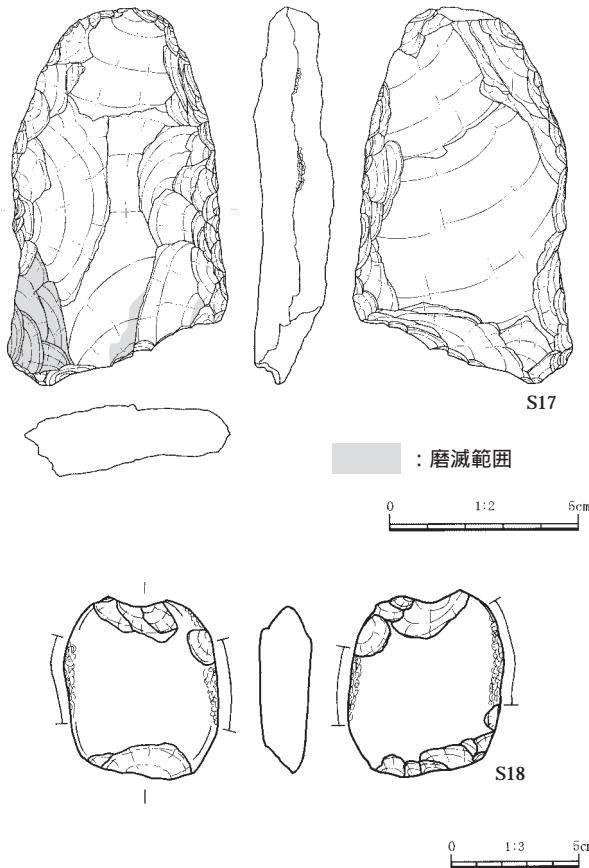


図16 第2調査地 ⑤・⑥層出土石器(2)

片・碎片類である。剥片は小型のものがほとんどで、石器器種の素材になり得るものはほとんどみられない。大半が石器器種製作時に生じた調整剥片であろう。石器器種は石鏃が主体となる。S1～S9は石鏃。S1～S7が黒曜石製ですべて凹基式。S1は素材剥片の剥離面を大きく残し周縁に調整を加えたいわゆる剥片鏃。S8・9が硬質安山岩製である。S8は平基式で、五角形鏃に近い平面形を呈する。S9は抉りの深い凹基式で、表裏に素材剥離面を一部残している。S10は緻密な黒色のガラス質安山岩製のブランクである。剥離面はすべて分割面で、原礫面が残る。S11・12は黒曜石製のスクレイパー。ともに、原礫面を残す切断剥片の一辺に刃部を作出している。S13～S16は黒曜石製の楔形石器。両極打撃による剥離痕や縁辺のつぶれがあるものを楔形石器とした。S14は剥離痕が大きく、剥片作出が目的の両極打撃による石核であろう。S15・16は狭義の楔形石器で、細かい剥離痕と著しいつぶれが見られる。いずれも使用方向を転移している。S17は粗粒安山岩製の打製石斧で、使用によると思われる磨滅痕が見られる。S18は粗粒安山岩製の打ち欠き石錘である。

これらの石器は、⑤・⑥層出土土器の主体となる後期中葉に帰属するものが多いと考えている。

(北)

表5 第2調査地 ⑤・⑥層出土石器組成表

	石鏃	スクレイパー	楔形石器	楔形石器 削片	加工痕の ある剥片	使用痕の ある剥片	石核	ブランク	剥片	碎片	打製 石斧	石錘	合計
黒曜石	8	3	13	1	5	2	1	4	194	74			305
硬質安山岩	2		1					2	40	2			47
粗粒安山岩											1	1	2
合計	10	3	14	1	5	2	1	6	234	76	1	1	354

【引用参考文献】

井上智博1991「西日本における縄文時代前期初頭の土器様相」『考古学研究』38-2 考古学研究会

井上智博1996「山陰西川津式土器の土器型式構造と恩原2遺跡土器群の占める位置」『恩原2遺跡』恩原遺跡発掘調査団

小林青樹2000「縄文時代早期末葉から前期前葉土器群に関する問題」『福呂遺跡1』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

千葉豊2001「沖丈遺跡出土縄文後期土器の編年的意義 崎ヶ鼻式と『権現山式』のあいだ」『沖丈遺跡』邑智町教育委員会

辻信広2003『名和町内遺跡発掘調査報告書』名和町文化財調査報告書第33集 名和町教育委員会

柳浦俊一2000「山陰地方縄文時代後期初頭～中葉の土器編年」『島根考古学会誌』17 島根考古学会